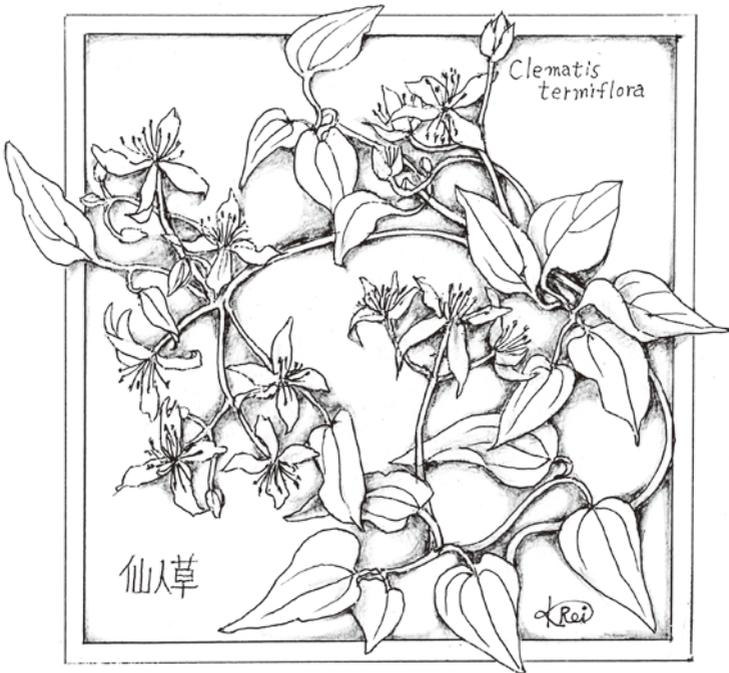


兵庫県現代詩協会

2024
ひょうご
現代詩集
通巻17集



ひょうご現代詩集2024

『ひょうご現代詩集2024』は通巻第十七集になりました。

坂本遼の詩について考える機会がありました。本会の会員でもある高橋夏男さんの『おかんのいる風景』や『流星群の詩人たち』、『西灘村の青春』などの労作に助けられながら、私と同じ北播磨に生まれた詩人の詩の営為について考えました。

「おかん もういんでえな／凍瘡あかざれがいたいやろ／こないさぶいさかいたまたよさり咳がでツれ以下略」やいたをたてる母子」（詩集『たんぼぼ』所収）

このアクの強い北播磨の方言を使って、素朴だが根源的な母子の情愛の世界を紡ぎ出して、詩史にゆるぎない足跡を残した詩人の詩の秘密について考えてみました。

それらの文字によってフリーズドライされたこの声を息にもどしてみることで、潤ってくる身体があります。この息遣いのリアルな空間が坂本の詩の魅力です。

ところで、「このブチこわれた田舎のオルガン」（草野心平が寄せた『たんぼぼ』の序文）と、草野に言わしめた方言による無骨な詩法を、坂本はどうやってつかんだのでしょうか。

そのあたりは高橋夏男さんの考察に任せることにして、坂本がこの詩の方法に突き進んでいったのは、関西学院の同級生であった竹中郁の詩の存在があったからではないでしょうか。

詳細なところは、別の所に書きましたので省略しますが、要点だけ言いますと、竹中郁の第一詩集『蜜蜂と花粉』に寄せた坂本の批評（『関西文学』大正15年）が残っています。坂本は竹中の詩集を高く評価し、その特質の幾つかを鮮やかに指摘しているのですが、実はそれらのひとつひとつを反転させると、坂本の

詩の特質に重なるのです。当時坂本は、後に『たんぼぼ』所収となる詩を『銅鑼』に旺盛に寄せていた時期でした。坂本は竹中の詩集の特質が、ことごとく自分の詩を反転させたものであることに自覚的だったのです。つまり、自らの詩のアイデンティティを確かなものにするために、竹中の詩は作用したのではないのでしょうか。詩人はひとりで詩を書いているのではなく、同時代を生きる詩人とともに詩を紡いでいるのです。

もうひとつ、坂本遼の詩をよむ過程で、彼が最も活動的であった大正末期から昭和十年代の詩人たちのことについて触れておきます。いわゆる神戸モダニズムという、詩をはじめとする前衛芸術運動が熱を帯びていた時代です。昭和15年の「神戸詩人事件」に象徴される官憲の徹底的な弾圧によって終熄を余儀なくされる時代に、多くの無名の詩人たちの存在があり、彼らはお互いに影響を受けながら、だれでもない自らの詩を紡いでいたこと。それは例えば、季村敏夫・高木彬編の『一九二〇年代モダニズム詩集』（思潮社）及び『一九三〇年代モダニズム詩集』（みずのわ出版）などによって知ることができます。神戸モダニズムと言えば、竹中郁とその周辺にのみスポットがあてられがちですが、実際には、詩集を編むこともかなわなかった多くの無名の詩人たちの存在があったことを、季村さんらの労作によって明らかにされています。

彼ら無名の詩人たちの詩のなかに、坂本遼の『タンポポ』を置いて見ると、またあらたな相貌のもとに、詩を書くという営為の魅惑や悦びや、それを裏打ちするような困難さと精神性があらわれてくるはずです。詩歌のアンソロジーとは、みずからが生きた時代にみずからをアノニムな存在としてうずめ、みずからの時代を詩（言葉）によって記録することだと思えます。

後の世に、そう読まれることを願いながら、ここに第十七集を上梓します。

目次

| | | | | | |
|-----------------------|--------|----|--|---------|-----|
| みずからをアノニムな存在としてうずめ・・・ | 時里 二郎 | 2 | 再送 | いのうえあき | 26 |
| さくらさくら | 青木左知子 | 8 | もう歌わない子守唄 | 井上 修子 | 28 |
| 甲東梅林 | 朝倉 裕子 | 10 | 面 | 猪谷美知子 | 30 |
| 喫茶店 | 芦田はるみ | 12 | 阿修羅 | 今村 欣史 | 32 |
| 時は流れ／彷徨 | 足立 勝歳 | 14 | 雨の音楽会 | 入江田吉仁 | 34 |
| 紫陽花 | 阿部 由子 | 16 | 浜辺にて／日暮れて | 岩井八重美 | 36 |
| 農夫 | 有松きょうこ | 18 | 男 | 岩崎 風子 | 38 |
| 歌のなかの歌 | 安西佐有理 | 20 | 投壘通信 雁信 | 内田 正美 | 40 |
| 求 | 飯島小百合 | 22 | 人間暮色 | 海整今日子 | 42 |
| 豊饒 | 以倉 紘平 | 24 | 聞こえる | 梅村 光明 | 44 |
| 言葉 | 小田 涼子 | 54 | 今に集中したいけれど | 江口 節 | 46 |
| ピンポン | 神尾 和寿 | 56 | らぶ・そんぐ | 大石 玉子 | 48 |
| 泥月 | 亀井真知子 | 58 | チョコレート | 尾崎 美紀 | 52 |
| かぎろい | 彼末れい子 | 60 | 小さな空地のカタバミ | 佐伯 圭子 | 82 |
| 一期一会 | 河原 真紀 | 62 | ふたり／造花／思い出 | 佐土原夏江 | 84 |
| 波間で | 神田 さよ | 64 | 哲人・一〇四歳 石井哲代先生 万才！／ 年重ねても 人生軽やかに／初春の真っ赤 な太陽——元旦にいただいた賀状に感謝して—— | 眞田 千穂 | 86 |
| 土煙の街 | 北野 和博 | 66 | 霧の馬 | 紫野 京子 | 88 |
| いつかの旅に | 季村 敏夫 | 68 | 山茶花 | 柴田 実 | 90 |
| 曼珠沙華 | 工藤恵美子 | 70 | 旅もまた | 関 はるみ | 92 |
| ガラスの水差し／笊 | 黒住 孝子 | 72 | 淀屋のクロノスの橋 | 高木 敏克 | 94 |
| 赤い月 | 黒田 ナオ | 74 | 月と「書付」 | 高谷 和幸 | 96 |
| 「空ろな自分」 | こじまきこ | 76 | 記憶・反記憶 | たかとう匡子 | 98 |
| 銀杏（空想） | 小杉 ヨウ | 78 | 柿と夕陽 | 高橋富美子 | 100 |
| 願い／境界／私はね | 後藤 益男 | 80 | 「戦争のはなし」 空襲の記憶／ ぼくが子どもだった頃 | たかはらおさむ | 102 |

| | | |
|--------------------------------------|-------|-----|
| 体育 | 滝 悦子 | 104 |
| 八月の影 | 武内健二郎 | 106 |
| oto hi | 竹之内 稔 | 108 |
| キムさんの浜辺 | 多田 和生 | 110 |
| そこに薔を | 田伏 裕子 | 112 |
| 天空亡所 | 玉井 洋子 | 114 |
| ヤスクニ | 玉川 侑香 | 116 |
| 晩鐘／コードレス | 辻岡真紀子 | 118 |
| 飛鳥路 | 津田真理子 | 120 |
| からみとられた | 寺田 操 | 122 |
| カラスとわたし | 土居 靖子 | 124 |
| 遠い木霊 <small>こだま</small> ——K・Kの舞踏のために | 時里 二郎 | 126 |
| うつくしいこと | とし 絵子 | 128 |
| 浜風になる | 永井ますみ | 130 |
| 時のタネ | 福永 祥子 | 158 |
| おいしいオレンジジュースの作りかた | 藤本 紘士 | 160 |
| 埠頭で／気候 | 細見 劉一 | 162 |
| ひろがる窓 | 牧田 榮子 | 164 |
| 過失——亡友Uに／小川を抱いて | 増田まさみ | 166 |
| 水たま | 松浦三津子 | 168 |
| オシロイ花 | 松下 玲子 | 170 |
| 木は詩が好き | 丸田 礼子 | 172 |
| 光の中で | 水こし町子 | 174 |
| 遠い日の少女Mと少年Kの物語 | 室井 正彰 | 176 |
| 夕陽の心音 | 森田美千代 | 178 |
| 水たまり | 森野とうが | 180 |
| 春をまつ | 山口 洋子 | 182 |

| | | |
|---------------|-------|-----|
| 歓声と静寂／責任 | 中島 友子 | 132 |
| 鳶 | 中嶋 康雄 | 134 |
| チェックの服をきた少女 | 中堂けいこ | 136 |
| ウズベキスタン | 西海ゆう子 | 138 |
| タシケント日本人墓地にて | 野口 幸雄 | 140 |
| 春 来る | 野元 正 | 142 |
| 地球号 | 橋本 千秋 | 144 |
| 穴かがり | 八田 光代 | 146 |
| 眠らない夜に | 馬場 秀司 | 148 |
| ソフトクリームの幸せ | 浜田多代子 | 150 |
| 柿 | 原田ひでよ | 152 |
| 夏の終わり／ウクライナでは | 平岡けいこ | 154 |
| 人生設計 | 福田 知子 | 156 |
| 山崎冬夏抄 | | |

| | | |
|------------------|-------|-----|
| 天空の鳥 | 山下 輝代 | 184 |
| 「ててっぽっぽう」 | 山下 晴久 | 186 |
| 秋のビブラート／百年かかる？ | 山本 眞弓 | 188 |
| ほおずきランブ | 横山美代子 | 190 |
| やさしい気持ち | 吉田 定一 | 192 |
| 新聞に「戦闘機輸出」の文字を見た | 凛 清太 | 194 |
| 難破船／エレジー | 渡辺 信雄 | 196 |
| 会員の発行物 | | 198 |
| 編集メモ | | 202 |

漆黒の海面から浮き立つ
ほの白い花の群がり
ゆるやかなうねりになって
わたしの
眼をいつぱいにふくらませた

あまい陶酔が
うつし身の危うさ 足裏にざわめかせ
花叢の波へ からだを押しやる
幻影には実体なかななどなく
泳ぎぬく支えにはならないが
徒に身をくねらせて波のあいだを

昏いうねり
ほの紅くおおい
花いちもんめの唄が寄せる
楽しく唄い揺れながら

どこかで怖さに
おびえてもいて

さくらさくら

惑乱の

美学

めまいに伏せたうつし身へ
春を重たく

甲東梅林

朝倉 裕子

公民館の庭は梅林になっている

梅林の隅に公民館を建てたのかもしれない

この公民館の一階がデイサービスになっている

母が通うようになったのは

この庭があったからだ

週に二日 送迎バスがくる

話好きな母は

友達ができた と言っていたけれど

次の日には

あの人私のこと覚えてないんやで

と不思議そうにしていた

今年も梅が満開になった

母が亡くなってからも梅林にゆく

壁を背にして

梅を眺めていると

なから聞こえてきた

スタッフの大きな歌声

ゆっくりと拍子をとって

—— あおげばとうとしわがしのおん

あいまに聞こえる

手を右に とか

手を上に とか

体操なのか

—— おしえのにわにもはやいくとせ

あわせて歌う老人たちの声も聞こえて

—— いまこそわかれめ

母の声も聞こえた気がして

梅は冬に生まれた母の名

九十六才の天寿を全うした

喫茶店

芦田 はるみ

いつだったかしら
ぜんざいはじめましたの張り紙をみて
義母とはいった喫茶店に
行き当たった

義母はおいしいおいしいと喜んだ
さすがにこの暑さでは
ぜんざいはまだないだろうが
入ってみたくなった

お昼時だというのに
店主と奥さんが二人だけ
スパゲッティをお願いします
接客にきた奥さんはすかさず
お飲み物もご一緒なら百円お安くしますという

染みついたたばこの匂いがする
どこか懐かしいジャズが流れて

野菜を刻む音が響く
きつと手作りなのだ
もうすぐ炒める音もするだろう

客はわたしひとり
わたしのために炒められる音に耳を傾ける時間
「うつくしいものを美しいと
思えるあなたのところがうつくしい」
相田みつおの色紙が目にとまる

おまたせしましたの店主の声に顔を上げると
想像していたとおりのスパゲッティと
タバスコとお醤油の小瓶
粉チーズではない
水玉模様のグラスにアイステイ
食べおわるころ

入り口のカウベルがなってもうひとり
黒い帽子のご婦人のお客
離れた席で何かを注文したみたいだが
帽子は取らずに坐ってすぐに
たばこを一服

奥さんは百円お安くの話はしなかった

しばらくすると
黒い帽子のご婦人は
お勘定をといって財布をだした
ありがとうございます

代金をうけとると店主は深く頭をさげた
私もつられるように
店を出た

後に残ったのは
いつものジャズが流れて
なれた匂いに包まれたふたり

義母は思い出すことがあるかしら

散歩の途中でみつけた
おいしいおいしいぜんざいを食べた
この喫茶店のことを

時は流れ

足立 勝歳

余部鉄橋から列車が落下した
直下の工場の五人が即死
鉄道員だったひろさんは
すぐにかけてつた

ダイアナ妃が日本を訪問した
警官だったのぶさんは護衛にあたる
強い香水の匂いがしたとのこと
すでに二人は亡くなっている

村の高齢者たちがつぎつぎと逝く
これは人の世の常
村を見渡すと空き家が増えている
かつては一家の団欒があったのに

それにしてもなんという値上げだ
米も肉も上がっていく
これからなにを食べたらよいのか
為政者は国のことを 庶民のことを
本当に考えているのか

国が衰弱していく
一体どうなっていくのか
杞憂であればいいのだが

蝉時雨 百日紅は紅に咲いている
時は流れ 地球は熱くなり
やがて消えていくのか

彷徨

孤児にもならず 飢え死にもせず
生きて来た

今日 自治会費を集め終わって
ビールを飲み ひと眠り
夢をみるが行く先が分からない
暗い道を彷徨っている

田舎の暮らしには食べ物があった
米はもちろんのこと 馬鈴薯 豆
大根 白菜 葱もあった

海からは鯖 秋刀魚
行商の老婆が竹輪を運んでくれた

悲しく辛いことは二十歳を過ぎてから
母が死に 父が死に
ぼくは一人なった

大腸の手術を三度もした
それでもなんとか生きている
悔恨は数えきれない

紫陽花

阿部 由子

テトラポットにぼんやり坐り

目の前に広がる初夏の海を眺めている
と、眩さを残した陽が突然降りてきて
傾いた日差しが水面にあたって弾ける

空がさらに陰りをおびてくるころ

小さな白い舟に乗って遠い国から辿り着いた少女が

一輪の紫陽花を届けてくれると

祖母が語っていたことを思い出す

弾ける光を合図に

記憶にとどまる心の糸と長く伸びる影を

追いかけて駆け回る子供たちに

咲き誇る紫陽花の花弁を一枚ずつ分け与え

パープル、ブルー、ピンクの淡い輝きを

結び、紡ぎ、編みこんで

誰も見ることができない

光のテーブルクロスを作ってみた

私だけの穏やかに流れる時間の中で

あの少女が空のかなたへ帰っていく

もう二度と出会うことがないところへ

手元にはピンクの花弁がひとひら残されて

農夫

有松 きょうこ

遠くに

畑を打つ一人の農夫
そこだけほんのり明るんで
あるがままが
素朴なまでに美しい

刹那を飛び交う
生れたてのひかり
時間も空間も
おのれの存在さえも
一瞬無くなっていく

素手の旅の
夕暮れは淋しい
ぼうぼうと
吹き過ぎる山風に
おのれを解き放ち

問うてみる

「生きるというのは？」

風は無言で答え

農夫は

ただ淡々と
畑を打ち続けている
生きるということに
少しも身構えることなく

歌のなかの歌

安西 佐有理

生は今日も死の序曲をうたった。
いつになったらこの歌は尽きるのだろう

尹東柱「生と死」(一九三四・二二・二四) 金時鐘訳

序曲はとつぜん
断ち切られた

下宿の猫にジヨバンニとなづけ

日々の夢をしるし

無数の詩人のみえない足跡に足跡かさね

三日後の日付で手紙を書いたあと

やってきた、いつもの朝

人称のとけあう大海へ

あなたは深く潜っていく

あなたのなまえが

地上や空のどこにきざまれようが

いま

あなたは歌

あなたがことば

ながい、ながい歌を

歌そのものとなつてうたう

あなたはわすれるのだろうか

川べりを歩くよろこび

葉ずれへのとまどい

文字のはざまのゆらぎ

赤い花の名を知っていたか

友をなんと呼んだのか

どんな筆跡でノートをつづったか

あなたの序曲の音色

音符休符のひとつひとつを

わたしは、わすれない

すこやかな昼のすべて

したしい夜のすみずみに

奪われ追われる時間

壊され消される重力を

いつくしむ生の傷痕をさがし

スキヤットをひきついで

それがわたしたちの前奏曲だと

耳と耳のあいだでささやくのは

異語の谷間では

聞きとられることがなかった

あなたの最期の声のけはい

求

飯島 小百合

自分探しも一人では難しい

縁持った人・物・事が

絡まり

解け

緩み

繋がる

また、怒っている

よく、笑っている

なぜ、泣いている

あなたを気にしている私

何とかなるさと踏ん張っている

今、また、ニュースから何ともならないこと

起こった

此の先、まだまだその先も

こんな中生きてきたんだと、

ふと、感じて

自分らしさを思った。

この、一瞬も、面白い。

若い頃　メーデーに参加したことがあった
大阪城下　日赤病院の看護師さんの一団のなかに
美しい魅力的なそのひとを見た
そのひとは　人群れと共に視界から消えていった

それから数年

大阪日赤病院に入院中の職場の同僚を見舞いに行った時のことだ
病院の玄関の短い階段を上がっているときだった

何たる偶然だろう

その看護師さんが　白衣姿で降りてきたのだ
束の間だった

声をかけることなどできるわけがなかった

あれは

たんなる偶然だったのだろうか

それとも人智の遠く及ばぬ世界からの

何かのサインだったのだろうか

どうやら

言葉を超えたもの

豊饒としか言いようのないものと

私は一瞬　すれ違ったのだ

それ以後は　大好きな馬や犬にはまことに申し訳ないが

馬齢を重ねた私の人生には

なにごともしこらなかつた

いや何らかのサインがあつたかもしれぬ

しかし　起こそうとしなかつた

なんてつまらないやつだろう

神さまが愛想をつかされたに違いない

半世紀以上も経って

私のこころの底なしの井戸には

豊饒という言葉だけが

透明なかなしみをともなつた湧いてくる

再送

いのうえ あき

嵐の所為だろうか
送られてくるはずの言葉が
わたしの元にまだ届かない

孤島から見上げる

今朝

空は何色なのだろう

木の枝にひっかかったまま

読み解けない徴が

音だけをたてている

霞んで見える大陸では もう秋のおわりらしい

紅葉した木の葉が

風でこの島まで届いたり

渡り鳥たちの

強い雨風に混じった

あの鳴き声が

わたしの頭上に降りてくるのなら

手紙は

行方不明でもいい

言葉には 見知らぬ他人が何人も棲んでいる

わたしのなかにも ふいに現れる

他人の顔をした言葉

私たちは親密なテーブルに座って、

何度も眼と口と耳を開きあう

今日は一日中、外国語の本をゆっくりと読んで

孤島のわたしに

再送しよう

もう歌わない子守唄

井上 修子

ねんねこさっしやれませ
ねた子のかわいさ
おきてなく子のねんころろ
つらにくさ

リンリンリンリン 遠くから
リンリンリンリン 鈴の音
やさしく近づき ささやいた
「ねない子 どこかに いませんか」
やみに冷たく光るもの
リンロンリンロン リンロンロン
リーン ローン リンロンロン
ズンズンズンズン 遠くから
ズンズンズンズン 足音が
ひびいて近づき 叫び出す
「ねない子 ここにいるはずだ」

やみをけちらし押しよせる
ズンズンズンズンズンズンズン
ズーン ザーンズンズンズン
「ねない子つれて さあいくぞ」

あの子はどこへ行ったやら・・・
笑って送り出したのに
勇んで歩き出したのに
リンリン鈴の音ねきく夜は
胸にこな雪 ふりつもる
ズンズン足音 きく夜は
胸に北風 ふきあれる

くらやみぬけたその先に
朝の光が待っていると
うしろ姿に 声かけた
あの子はきいていたのやら・・・

面

猪谷 美知子

浮ついた声がする
欄間中央に掛けられた翁の面が
対角線上に位置する若乙女の面に
男の視線を送っているのだ
若乙女はもじもじもじ
さらに男の視線が増す

どうしても超えられなかった一線
面袋に入れられたままで
彫られてから飾られたことのない
生成の心が騒いでいる
じけつと湿った声が漏れる
般若にまでいけば心は一瞬でも穏やかになる
その一歩が踏み出せなかった
暗いところでまたいつもの堂々巡り
般若はぐつと睨みをきかせ

眼も角も光らせて
面一番の誇り
翁は生き生き
若乙女の頬は桃色
角が尖らない
口角が上がらない
眼が光らない
それは彫師の心か 自分の心か
あと一歩あと一歩で
散る花びらに映える面にと
時空に話しかける声を確かに聴いた

阿修羅

今村 欣史

阿修羅を見に行こうと言う
孫の文実^{ふみ}だ
似ていると言われたというのだ

興福寺のうす暗い堂内
照明に浮かぶ阿修羅
対峙する 少年
視線が交わされる

こんなのを作る日本人は凄いなと言うと
えっ 人間が作ったの？
あったのかと思った

そうか
阿修羅はこの世に
最初から存在していたのか。

雨の音楽会

入江田 吉仁

招待状

雨粒が
空から——と落ちてきて

アラアラ

♪ 音符になっちゃった

♪ 風があればこうなります

♪ こんや、雨の音楽会に来てください

音楽会

そとで雨が 降っている 音が聞こえる

まっすぐの雨が順に降っている

軒先から雨だれが

♪ 〓 60のテンポで降っている

私は心地よくて さて自分は会場にいるはずだが と

放っておかれて事情がわからないまま（風はなごさうだと、惚け）

激しくはない雨の雨だれが

ずっと同じ調子で私のところを撫でるのにまかせた

赤い目覚まし時計が頭の脇にある それがあるわけもわからない

私が 今 首を回して目の前に

目覚ましの正面を見つめ

耳もそれに注ぐと

♪ 〓 60で

雨だれの音が聞こえる

目覚まし知らぬ振りをして秒針をまわらせて

先刻から雨だれの振りをさせていたのだ

♪ は並んでくるくる回りながら

私の方へやってきます

しかも音色まで本物にそっくりです

目覚まし時計は演奏家

秒針が楽器

そして私は きげんよくだまされる上客

浜辺にて

岩井 八重美

「あん魚、嬉しってたまらんとじゃね」
何度もきらめく水面を蹴って
思い切り空へ飛ぶ小さな生きもの
この上なくいとおいしいものを
包む目で見つめていた母

浜辺に二人きりだったこと

あまねく初夏の光に輝いていたこと

渾身の舞を何度も見せた魚がいたこと

母娘という結び目が

解けて乾いていく今

あの浜辺に立ち

あなたの中心からの

言葉を聞きたい

日暮れて

ペランダに置き忘れた

空ビンに籠もる

夕焼けの切れはし

指を這わせばチリチリと

伝わってくる響き

波に引かれる貝のように

するりと中へ

引き込まれそう

裾を曳いて

山の向こうに

落ちていく夕日

しだいに暗くなる

今日という日に似た

からっぽのビンに

指先に残る赤が

ほんのり灯る

野犬

岩崎 風子

嵐雪よし

野犬の遠吠えも

最終夜行の汽笛も

ふぶく時の重なりに吸いこまれていった

揺れる梢にやどる痛苦

ひとすじの異和の源

侵攻なんて

テクノロジーはいつしか社会に埋めこまれ

やがてみな 忘れていく

そういえば かつてあったよそんなこと

災いの未来予測

われらの記憶をうばい

ひ弱い脳をゆさぶって

裾からそうと手を入れながら

やれそれこそが決定的ではないかと

なべて同一集団化する犯しと落下

ひきつった国境の対立

ぶらさがる混血の敷衍ふせん

もう逢わずにいたい ヤコブ・ペーメ

あん畜生ども お道化の金星人

足ぶみしているまに言語は錆び

われらの存在は尾のないホーキ星

みちみちた世界に空腹さまよう痩せた

野犬の影

「……ああ あの時はもうおしまいと思っただよ」

無表情に視線をうかせて立っている年老いた男
疲れて、それでいてまだ何か考えているように思える

あなたはまだ歩いているのか
ここで立ち止まっているのか

わたしを遠く連れ去りそうな風を纏って

「ゆっくり話を聞かせてください」

歩いてきた路のことや 出会った人々のことを

聞かせて下さい

話せないのは分ります

筆に絵具をつけて線を引いてみます

線はあなたの乗っていた船せんのように進み、羅針盤はありません

飛び散った砲弾の破片の飛ぶ放物線を描く戦せんかもしません、

どこかでセキレイが啼きました、声は森をながれ、背をながれ

何れにせよ 遠い遠い道程です

影を描きます

あなたの物語を文字にします、わたしは深い森で迷います、

森に出口はありません、木々は鬱蒼ともつれあい、ざわめき

葛は樹々の枝をつたうセンになり、センは文字になりことば
に変換され、いつの間にか降りはじめた雨です、ここにいる
わたしを濡らす、ここを濡らす、風の森で影が揺らぎ、い
まことばは揺れています

目を閉じた一瞬に、100年はすぎる

広い広いカンパスだ

枠はないので怖ろしい空間だ

男の畑はまだ見えない

青という文字がほどけるのだと思いました。しらない誰かから、海をわたって、便りがとどく。ならば、うしなわれた名も、壘に入っているのでしょうか。空の色、海の色。とけそうで、まざりません。そんな水平線を、いつからか、みるのが、ええ、好きでした。

「雁信」ということばも思い出されます。古代中国で、雁の足に札をつけて、遠くに思いを託した故事から、手紙の意味があるそうです。雁が去り、わたってくる。その狭間に、文字が降っているようです。

硝子のかたい、もろさのなかに、羽がさしこまれました。古い壘のほうが、温かいような気がするのは、手から手へ、そんな人肌の記憶が感じられるからでしょうか。時をこえて、線、青く、まざるといい。

はつかり、かりがね。歌に詠まれた雁は、鴨などをふくめた、わたり鳥を指したようです。ふだん、水面にいる彼らが、空を飛んでいるのを見ると、いまだにはつとします。わたってきたというのに。そんなことも、壘につめる姿が、

ほんとだね、うつります。

海に近い大きな川や貯水湖に、冬鳥がみられるようになりました。種類が多すぎて、名前と姿が一致しません。枯れ草のむこう、水草のあいだに、うかがい、水尾をひき、時に飛びたつ。冬の水辺はおおむね澄んで。

水底をひきつれ、硝子がくぐもった音をたてていた。雁がわたる、壘をわたす。羽のペンが、およぐように、水の裂け目を、青く、ゆくよ。名をなくした、しずんだ先から、切りとられた景でしたか。

壘がうかぶ、投げた記憶も。誰の、どちらから、でも、よかったのです。人肌が、水に線、ひくように、雁、まざりません、わたるからさ。それは、いつからか、ええ。濡れた文字が、とけそうで、読めないままに肌をつたった。

水俣チャンポン

一般財団法人水俣病センター相思社が運営する水俣病歴史考証館は一九七四年に水俣病患者が働くキノコ工場として建てられたが一九八三年に閉鎖されその建物を水俣病の事実をリアルに伝える実物資料を多数展示知識としての教訓を伝える場ではなく水俣病事件を通して社会の在り方や一人一人の生き方を考える場となることを目指す施設にあるかつて猫実験に使う猫を飼う小屋では一九五九年アセトアルデヒドの廃液をかけられた餌を与えられたナンバー400という猫は実験開始の七日後に急にぐるぐる走り回りヨダレを流して水俣病様の症状を呈するもそれはチツソ幹部によって隠ぺいされその結果患者は増え続け被害は拡大し続けるすでに一九五三年頃に漁村では猫が狂い死に全滅した地区では猫でんかんと称されネズミが激増して悲鳴を上げていたが原因についての調査はされずその後一九五六年チツソ附属病院の細川院長らが今まで見たこともない患者が受診したことを水俣保健所に届け出て海辺の調査が始まったが患者は同一家族や小集落で多く発症したため伝染病と疑われ隔離されるも熊本大学はチツソの廃液中に含まれる水銀が原因と発表さらに熊大の調査によって一九六一年に胎児性翌年に小児性の水俣病患者の存在が初めて確認された以降患者認定を三万二千九百一人が申請するも認定された患者は二千二百八十四人しかいないことに驚く昼食は水光社ファミリーストランでの人気メニュー水俣チャンポンを選び損ねたが水光社は日本窒素肥料水俣工場消費組合として設立されたのが始まりで一九五〇年生活協同組合水光社に名称を変更その後熊本県学校生活協同組合と二〇一四年に合併生活協同組合くまもとに改名するも水光社の名

前が施設名に残っており曾てチツソ水俣支社から水俣病患者宅に届いた見舞品の包装紙には水交社と記されていたのだ食べそびれた水俣チャンポンを提供する店は市内に二十軒近くあったがそのルーツは一八九九年の発祥とされる長崎チャンポンでありこれが長崎市民の湯治場である島原半島の小浜温泉に伝わりそれが海を越えて天草に伝えられさらに海を渡って水俣に辿りついたとされる人心を掴んだ味の魅力を実際に味わう機会を逸したことに悔いが残るが次の訪問時の楽しみにしよう

と店を出て地図を持たずに向かう水俣川にはチツソが一九五八年に流した金属水銀の量は四〇〇〜五〇〇トンになるそれは八幡残渣プールから水俣川河口に流して不知火海による希釈を期待した廃水対策だったが不知火海全域に被害は拡大し厚生省の指導で一九六〇年には元の百間廃水口からの排出に戻さざるを得なくなりさらに垂れ流しは続いた水俣川の右岸を下流に向かって歩き路地に入ると白浜町八の三六主はもう居ない石牟礼家には京都の古本屋カライモブックスが移転してくることが知られており奥田夫妻の書いたさみしさは彼方の帯には石牟礼道子への思いを胸に京都に古本屋をひらいたふたりが試行錯誤の道のりと水俣移転に臨む勇氣と記されていることを胸に道子さんの墓碑のある真宗寺を目指すそこは公立健軍小学校発祥之地とされ境内には道子さんの法名である夢劫が石に彫られ据えられていた二〇二三年九月二六日水俣病特別措置法で居住地域や年齢などの線引きにより救済措置を受けられなかった熊本県や鹿児島県出身の未認定患者128人が国や熊本県原因企業チツソに損害賠償を求めた集団訴訟において原告全員を水俣病と認め一人あたり275万円の賠償を命じる判決を下した大阪地裁の達野ゆき裁判長は二〇二二年不知火の海を訪れ今も病苦にある人たちの声を聴き水俣病の原因企業チツソの工場と被害者の住まいの位置関係を確認し水俣港を船で出発して不知火の海を海上から視察しさらに対岸の天草上島に上陸天草諸島の最高峰である倉岳に登り山頂から不知火の海と水俣の街を一望していたことが画期的で人間的な判決に繋がったのだろうが原告患者の願いを踏みにじり国と熊本県原因企業チツソは大阪高裁に控訴したのだ

聞こえる

江口 節

歌声が聞こえた

(というのだ)

高台を目指しているとき

みんな逃げたはずの町で

家の中から ひっそりと歌う声――

黒い壁のように 津波が迫った

(というのだ)

ひとが うたう

ごらん

黒い壁のように迫る

ひとのにくしみ

めらめらと地図を燃え上がらせ

食卓に血の海を映し

(わたしは林檎の皮を剥く)

黒い壁のように

地上を食いつぶしていく

ひとのむさぼり

ひとのあざとき

(わたしはパンをちぎる)

もやもやと 立ち昇ってくる

身の奥底からうごめいてくる

まだ未分化の――

うごめくもの

生が揺れるとき

うごめくもの

生が軋むとき

それを

詩

と わたしは呼びたいのだが

今に集中したいけれど

大石 玉子

今に集中して生きる

今、この時を穏やかに生きる

そう決めていても

そう わかっていても 不明の・・・

未来は 気になる

今、自分ができていることを やるしかない

そう わかっていても

落ち込んでしまう

ただ落ち込んで ただそれだけでは

何も得られない

落ち込んでいても 生きているのだ

だから 楽しく生きる

そして ひたすら生きる

とにかく

工夫して

できることをやり

一歩一歩 進むしかない

楽しく感じられる方向を めざせば

何かが 見つかるかもしれない

小さな一歩 本当に小さな一歩

工夫して

とにかく進む

アスファルトの坂道に小枝が
車は来ない学校に沿った歩道の舗石にも
落葉する季節でもなく
嵐が吹いたこともないのに
小枝が文字になる前の姿勢で散らばっている
疎らに散って少し風景を緊張させるのは
散らなかつたよわいを重ねた人が
足を止めて小枝の文字を眺め
頭を捻り立ち去っていく
こっくり、かたかた
象形文字が路上で声を上げてても
誰もが通りすぎるのだ
自転車の前輪が
踏んづけるとサドルに少し圧がかかる
少しだけだが小枝が主張
群れなしたハトは
いつせいに爆ぜるのだ

遠くから重低音の音が流れてくる
バスタームと増幅されたベース
広場でのロックバンドの演奏のようだ
爆撃音ではない、木々は揺れてはいない
小枝でよかつたのか
散らばった人骨や
ミサイルの破片だつたりしたら
こっくり、かたかた
ぼくは背筋を伸ばしてみる
両手を左右に動かし
闊を何度か確認しながら
首、肩、膝を
地面に投げ出されているようだ
さつきまで乗っていた自転車はバラバラ
スパークから平和が見えるか
小枝の言葉は薙ぎ払われてはいるが
なんらかの形は示され
陰も、焼け残った身体も
言葉が発している
こっくり、かたかた

むき出しの鉄骨の間から
抜けるような青空が見える
彼は裸足のまま
腕の取れたぬいぐるみを抱いて
途方もなく遠い目をしていた

昨日と今日の境目に
親しい人 知らない人 すれ違っただけの人
数えきれない未来が
一瞬で飛び散り
町が静かに横たわっている

足の傷は痛まないのか
お腹は減っていないのか
明日の扉は見えているのか
十文字に閉じた唇から
最後に漏れた言葉は

マティだったか バーティコだったか

画面の奥から君の瞳が私を射抜く
時間がずれて太陽が傾く
私は思わず
握りしめていたひとかけらのチョコレート
そっと彼に差し出した

空が青いよ
どこまでも青いよ
すべてを失くした街の
一枚のスカーフのような空を
私はただ見ている

滑り落ちた彼の未来を

(注) マティ(ウクライナ語でママ)
バーティコ(ウクライナ語でパパ)

言葉

小田 涼子

留守番電話にくぐもった低い声

昨日は大変失礼なことを言っただけで申し訳ありませんでした
おわびを申し上げようとお電話いたしました

聞いたことのない声の主

きつと彼女は 一晩中自省の念に苛まれたにちがいない

電話のお詫びの言葉は

相手に届かぬままに宙にただよっている

電波にのって飛び交うたくさんの言葉

どこの誰ともわからぬ言葉

時に主語が省略され

時に意図的に外される顔

顔を持たぬ言葉がうろついている

どこの誰が発したか分からぬ言葉

時に人を傷つけ その命までも標的にする

公園で出会ったバギーの中の赤ちゃん

その目が 私の目と合った瞬間

「やあ」と笑って挨拶

死への入り口に向かっていた母が

突然 目を見開き じいっと私を見つめた

その目は

「今までお世話になったね ありがとう」と言った

言葉に出さないとわからないこともある

言葉に出したから傷つけることもある

言葉に出さなくても伝わる心がある

ピンポン

神尾 和寿

電気洗濯機の発明で
洗濯に要する時間が
余った

その余った時間に
釣りの好きな人は釣り糸を垂らす
卓球の好きな人は
来た球を打ち返す
ピンポン

輝かしい音色よ
ピンポン

ピンポンは
排水口から下水道を伝って
海のなかへと流れ込む
あとからあとから

魚は眠れない
気が変になる
生き残れるのは
最初っから変だった
魚だけ

むずかしい球に
初恋のようにあまい球
どれもこれも
瞬時に打ち返す

胸を張る
ピンポン

泥月

亀井 眞知子

四十五度の斜めに構え
泥水に突き刺ささり
傾きゆらぐ
軟体生物のように
形を変えながら

溶けていく姿態はナメクジの様に
裏返しになりながら 臓腑のくねりに
混沌だけが吐き出される
微風にさえも揺らぐ池の月
青い光にも そよぐ

半夏生の夜には
女が 躍り出て
崩れた化粧の赤い唇から
解けぬ謎をつぶやき
明日の不可思を残す

言葉の甘さに魅せられ
泥池に浮かぶ憧れを含むと
苦い唾液が あふれる
思考は言葉にもならず
沈水植物の沼の中で回る

浮ぶ泥月
ゆらめいて ゆらぐ

昨夜は 満月だったので
ホテルに着くと突然激しい頭痛と吐き気に襲われて
眠りこけてしまい
首のトルコ石に月光浴もさせなかった

チュニジア南部のオアシス都市トズールは
砂漠への入り口の町である
暗いうちにホテルを出た4WDはひたすら駆けた
ヘッドライトが広大なサハラ砂漠を 舐めて 舐めて
うっすら空が明るんできると
ベルベル人のドライバーは急ハンドルを切り
礫砂漠をはずれて小高い砂山のでっぺんに乗りあげた
そして ライトを消した
赤いジャメル砂丘

足裏で赤い小麦粉のような微粒子の砂がヴヴヴと鳴く
気温零度 遠い地平線

東の空の雲が壮大に黄色に染まり
朱色に変わっていく
柿本人麻呂のかぎろいが 異国の空に立ち
青や紫も入り混じる空に
やがて金色の太陽が顔を出した

アン・ディナール
青年がひとり どこからともなく現れて
静かに声をかけてくる
耳の大きい痩せた動物を抱いている
砂漠キツネといっしょに写真を撮って一ディナール
痩せた青年の耳も大きい

かぎろいも 消えると
いっぺんに気温が上がってくる
たとえ太陽がなくなつたとしても
八分間だけ この星は暖かいので
すぐには 誰も気づかないのだという

一期一会

河原 真紀

老師 賀状の礼に渡したきものありという
新年の一言ほしさに
寒中の京都河原町
酒さされても干せず
突出し 巻物頼張りつ
思ひ出話は食い違い
互いの年齢かめて
哲学めくには難しき鮎屋の昼
熱いほうじ茶をしておに
老師が取り出すは
ひとかたまりの原稿用紙と革の筆入れ
人生は一期一会 今日が最後と思うてる
物書きの命なるを我に託して今生のいとまごい
がんばってや
と 二度までも
声掛けられ背な押され
別れの場まで二人して

提げゆく鞆の重さかな
次げることばの見つからぬ
長きしじまのつらさかな
かくしゃくたる後ろ姿
いついつまでも見送りぬ
振り返らぬと思えども
などか最後と思われぬ
されど最後の眺めなり
とぼとぼとせる足取りに
空手で帰らせし罪いかばかり
頼もしき言かくるべきは我なりき
一人で持てる荷の重さ
じわじわと身にしみゆけり
四条通柳馬場応拳旧居の小暗がり

波間で

神田 さよ

だれもない夜の寝室で
さびしいジャズの曲
なりやむと
死者が静かに近づいてくる
冷たい体温は寄り添うことを拒んでいる
睡魔の森で
闇夜に月ばかり

浮いている
わたしのからだ
夜の海はどうしてこんなに静かなの
前にも
後ろにも
進まない
水を掻く手は
だらんとして
目の前を流れゆく失われた時間

手も足も何かが引つかかって重い
黒ずんだ白い不織布
重圧にさらされたからだに
痣くつきりと
漂うわたしのからだを未来へいかせてくれないもの
みえない岸辺をみようとす
痛む目の奥
死者たちは
何処へ向かっていくのだろう

波間に
ぷくん
息がはじける

土煙の街

北野 和博

廃止された路線のバス停に
五、六人が並んでいる
ほどなく土煙を上げながら
バスがやってくる

蟹の群れはどこに行ったのだろう
この街に引越したころ
真夜中に現れて
明け方には消えたおびただしい群れ

カラスが電線を覆ったことも
公園の樹が残らず枯れたことも
これらの予兆のような出来事は
何の事象も起こさず通り過ぎた
日がゆっくりと傾いて
バスが帰ってくる

五、六人が降りてきて
夕闇に溶けるように消えてゆく

いつかの旅に

季村 敏夫

妻の寝息

偽の詩人だと規定するひとと
人前で語りあっているとき
おもわず口にした言葉

下世話なことを

えもいわれぬ感じで
星の彼方に投げうって

これは大地震の前に贈られた
寝息を描いた拙作への感想で
六甲山の麓の庭に谷川のせせらぎ

そそがれるもの

あの日出会ったひとびとが
語りあうひとのあわいに近づく

語り終えると醒めている
濡れていないのに廊下のひかり
置き忘れたままのペルソナ

部屋は小さな舟

重なる息が水をいざない
夜の空へと舞いあがる

曼珠沙華

工藤 恵美子

敗戦後七、八年は経っていただろうか
駅前通りから少し折れた道筋に
おしゃれな洋裁店が店開きした
ショーウィンドーの前で
道行く人は皆足をとめた

戦後の女性が憧れた八頭身
そのマネキン人形と
並んで置かれた大きな壺
その壺に投げ込まれた真赤な曼珠沙華
二抱えはある

墓場へ続く土手の道を赤く染め
根に毒を持ち
手折る人のなかった曼珠沙華

私は洋裁店の中を覗き込んだ

萌黄色の布を纏い、腰には縄状の紐を巻いた
長身の若い女性が
魔法のような手さばきで立体的裁断をしている
人台に布を重ね
躊躇のない鋏の先が布を裁断していく

店の前を行ったり来たりして
何日になるだろうか

私は「洋裁師募集」とあるドアを押した

ショーウィンドーの中の
真赤な曼珠沙華
解き放たれた色として

束の間の青春を過ごした空間
おしゃれな洋裁店のあった街角に立つ

ガラスの水差し

黒住 考子

ガラスの水差し 三百円
メイド・イン・チャイナ
工業規格品

無色透明 無色と感ずるふしぎ

斜め十度に傾く真つ直ぐの胴

注ぎ口だけおちよぽ口

水飴をのぼしたような取っ手 手になじむ

底五分の一の水が へらっと笑った

ギヤマン ビードロ 玻璃なんて知らないよと
背筋を伸ばして 胡坐をかく
シヨートカットの少女 十四歳の素っ気なさ

箆

竹で編まれたものが好きだ

細長く割られて柔らかく撓う竹の

うっかりしていると指に小さく刺さったり

ピシッと跳ねて顔を打ったり

心を配りながら編んでいく手にこもる気

編みこまれていく文様に細める目

微妙にゆがんだ形を修正する適正な力

現場を詳しく知るわけではないのに

そんな按配が伝わってくるようで

箆で水を汲むという

流すものを流し 漏れるものを漏らし

残るのはキラキラ光る水滴だけかもしれない

それもやがては消えて

それでも 箆は箆として在る

洗った菜をあげておく箆は
流しの近くに置いておく
洗った心をあげておく箆は
胸の真ん中に置いておく

赤い月

黒田 ナオ

夜にむかってピストルを撃ったら

出てくる出てくる

猪、蛙、百足、狼

寄り目に、嫉妬、落とし穴

ゴキブリ、借金、殺人鬼

夜逃げ、嘘つき、人攫い

まだぞろぞろとやって来る

ぞろぞろぞろぞろピストルを撃ったら

奇妙な声をあげながら

やって来たのは血だらけの蛇女

女は首に青大将を巻きつけ血を流し

ひょいと振り返ると

わたしの目をじっと見つめて

にやりと笑う

仕方がないからピストルを撃ったら

からっぽになった

もう一人のわたしが

空からどすと落ちてきた

そのまま地面に寝ころんで

真っ赤な月を

見上げている

闇の中では

死人みたいな顔の電信柱が

ツエツ、ツエツ、ツエツと

唾を吐き続けていた

「空ろな自分」

（こうじ まきこ）

一日一年がいつのまにか
無口に通る過ぎて行く
目に見えない時に置いて行かれ
前へも後へも動かず
立ち尽くすばかり
空の広さにも青さにも
あんなに広いのに
青いのに雲もいるのに
目に入らないなんて
時を削いでしまつて
惜しくて仕方がない
空ろな自分がここにいます

今年八月に暦を買つた
一年に熟せる事を暦に記し
体に言い聞かせながら課題として

空もじつくり味わおう
あらずと先の古郷の空よ
きつと風に乗つて
もうすぐやってくる
とりとめのない
はなしをしよう

子供達が銀杏の黄色い落葉の絨毯のキャンバスに黒いビニールテープで足絵を描いた。裸足で様々なポーズを試みていた。

結構な賑わいを呼んだ。

それ以来、毎年の恒例の行事になり、

作品に関わった子供達は町の人気者になった。

当年は足型の発砲スチロールを貼付けた作品が一等賞を獲得した。

たいそう話題になった。

展示の後の交流会では

子供達が銀杏の落葉の絨毯を踏みしめて

「カゴメ、カゴメ」を披露した。

子供達の歓声を呼応して地上の銀杏の葉が

舞い上がった。

中心の子供一人を取囲む子供達の輪が廻転し、子供達は喜ばし気な表情を見せた。

雨が降ったり、強い風が吹けば、

作品が台無しになるので、

一作品ずつドローンが撮影して記録保存が施された。

後日、館内でパネル展示が催された。

これにより、多くの市民の知られるところとなり、作者たる子供達は誇らしげであった。

でも、一番嬉しかったのは

銀杏の樹そのものであったかもしれない。

来年も頑張るぞという気になったのかもしれない。

でもその秘密は銀杏葉の裸足での感触の素晴らしさにあり、

銀杏葉の不思議さにあったのではなかったかと確信している。

願

後藤 益男

生まれてきたのなら
人を好きになつて
ごらんなさい

生きてゆくのなら
連れ添う人を
見つけなさい

叶えたいのなら
花の生き方を
見習いなさい

死んでゆくのなら
思い出一つ
残しなさい

人として

生きてきたのなら

境界

曲がり角を曲れば
何かが違う
見慣れない町

峠を越えれば
何かが違う
見慣れない風景

トンネルを抜ければ
何かが違う
見慣れない世界

現世と幽世の世界は曖昧だ
何処で迷い込むか解らない

あの世に迷い込まぬように
境界の道には
地藏様や道祖神が置かれている

なにも怖い話ではない
気をつけていけば迷い込むことはない
焦らずに歩いていけば
何も気兼ねせずに済む
この世界は気楽だ

私はね

夏の空
高く高く
その奥へ 奥へと遠ざかる星

着飾ったもの
要らないもの

壊れたもの
貰ったもの
何もかも捨て去って
捨て去って 捨て去って
遠くへ 遠くへ

三つだけ
いや 二つだけ
一つでいい
一つだけ手元に

去りゆく者に
手を差し伸べてはいけない
声をかけてもいけない
見送ってもいけない
泣いてもいけない

私はね
私はね

小さな空地のカタバミ

佐伯 圭子

わたしの小さな空地は
小庭の槇の木の下にあつて
春には菫の花を咲かせ
初夏には片喰の花を咲かせる
黄色 時には白 ピンク

かたばみとひらがなで書いてみると 優しい
片喰の字 怖い
ワタシも齧られたことあつた
どこかで

貧乏草と呼ばれたってカタバミは蔓延る
地面から噴き出る草の塊 草の塊

先が喰われた三つの葉 集まって
よく見ると完璧なハートなのだが

種子が飛んで落ちて

芽生えて

草になつて揺れる

賢いカタバミ

酢漿草

真鍮を磨くのに用い だつてさ

わたしも磨かれない

わたしのことば 磨かれない

疥癬の薬にもなつて

沁みる すっぱく

蒴果を結ぶ と書かれると

とても 愛しい

いつかはじけて飛ぶ

いのち

ふたり

佐土原 夏江

旅に出て乗り物にゆられ
話が途切れない
海が好きあなた
空が好きあなた

海の色は空の色
いままでわたしは何をみていたんだろう
空の色は海の色
いままであなたは何を見ていたんだろう

造花

本物としか見えない
芍薬の花
白とピンクの
清楚で甘やかな気配

咲きつづけるしかない造花
枯れることを知らない悲しみを思う
せめて眠りの時間をあげよう
部屋の灯りを消す

思ひ出

コーヒーを飲みに入る
いつもの場所に座ると
気分が落ちつく

何十年も前から
通った喫茶室
友人や知人と
出会った場所 別れた場所

燃えあがることも
悲観にしてくれることもなく
ゆるゆると時を過ごす

ふいに吹き出す間欠泉のような発熱
この場所でのコーヒーが懐かしい

哲人・一〇四歳 石井哲代先生 万才！

眞田 千穂

人生一〇〇年時代の先頭走者！
その気力 知力 体力は

並外れて びっくり仰天

私達後輩は その尊いお姿とお言葉に
ひたすら勇気づけられて
学ぶことばかり

広島県尾道市の石井家に嫁ぎ 夫様は同僚
小学校教師一筋と介護、田畑、地域活動
跡取りなくとも 親戚や周りの方々との交流
支援の下に一人暮らし

さてさて、今日も明日も
哲人・哲代先生と共に、自然と仲間たちと
フレ－フレ－ 前進！前進！

年重ねても 人生軽やかに

優しく 楽しいタンゴが

陽当る部屋に鳴り響いてる

時は過ぎ去り 心は何十年も前に戻って
タンゴの軽いリズムは 佳きしらべは

いとも易々と 年重ねた心に
訪れてきて うれしさは限りなし

タンゴ界大御所菅原洋一歌手は
九十才で高らかに「知りたくないの」と歌い上げる
拍手喝采は場内に響きわたる
タンゴ「たそがれ」の出会いより生涯現役に挑戦

兵庫県加古川市生まれで
その美声に人々は感嘆

今もきらめくタンゴを 多くの
人々の心に送り届けている

老若男女 楽しく優しく
軽やかなリズムに乗って歌い出す

「バラのタンゴ」「奥様お手をどうぞ」「恋心」
「ジーラ・ジーラ」等 辛く悲しい歌も心に

しみりと鳴り響く、タンゴは若返りの妙薬
その優しいしらべに心は静かに憩う

初春の真つ赤な太陽

――元旦にいただいた賀状に感謝して――

楽しみはいつまでも続く
高く空を見上げて

まっ赤な太陽は照る照る
すべての大地に 人々の心に

何がそんなに楽しい！って
言われても足元手元に
拡がる幸せの海原

とんとんでピョンピョン
うさぎと共にいきましよう！
はるか遠く 海山超えて

皆様のうれしく楽しい賀状に

アラン・ドロンの映画「太陽がいつぱい」
観たことないけれどその名も懐かしい
太陽はいつの時も世界に輝く

大勢のお年寄りも
史上最年少人数のみどり児さん達も
一緒に歩いて生きて大空へと
太陽が待つ天にまで昇りましよう

さて今どきの時を超えた達人兵法家
生国播磨の宮本武蔵 史上最強の武者
その二天一流の剣術 諸芸 精神 人格に
追従する者なしとの聞こえも久しく大きい
今の混迷を深める世に武蔵は我らの太陽
大空に舞う武蔵を載せた大風を追って
美しい蝶アサギマダラの行方を追って
行くは 争いのない平和な天地へと

宮本武蔵に倣って
強く 優しく 美しく
負けられません！
専制主義者や諸悪の王 欲得の権化に！

霧の馬

紫野 京子

その馬は霧のなかに立っていた
黒いシルエツトが
白い朧なものを くっきりと分かち
そこだけ確かな存在を際立たせた

やがて 朧のなかから
夢の明るさが舞い下りて
金の翼を生んだ

鈍いものが 光るものに変わり
遠くから響いて来るものがあつた

嘶いなきとともに一瞬前足を挙げ
立ち上がったように見えたが
再び霧に包まれ見えなくなつた

やがて馬は 翼を広げた

広げた翼は 光に変わり
ただいちめんの金色の輝きになつた

この世の遍あまねくものを照らし
しかしそれゆえに すべてのは盲いた

あまりにも強すぎる光ゆえに
盲いた我らの水晶体
遍く世界に充ちわたる 我らの蒙昧もうまい
世界は涙と齒噛みに充ち
空は暗雲に覆われ
いちめんの灰色に浸された

空も海もその果てを見せず
どこまでも混濁した霧に包まれた

山茶花

柴田
実

今朝

山茶花が

二つ開き

花びらが一枚

落ちていた

何事も無い静かな夜

一枚の花びらが

しじまのなかを落下する

何事も無かった夜

ミサイルが落下するウクライナ

十四人の市民が殺された夜

旅もまた

関 はるみ

不意に空っぽの自分が許せなくなった時
一年毎に人里を訪れるという客まろどに似せて
その時は旅に出る
旅は諸々の比重を軽くしてくれる
自然は多様性そのもの
その中に身を置くだけでいい
凝り固まった価値観をほぐしてくれる
旅人となって生きてみる
危険というはらはらすもの
その高揚感が生き生きさせてくれるか

夜を旅する小川になり
底を流れる冴えた水に
今まで気付かなかった
小石が騒めいて光り
眠りから覚めた小魚まなこの眼
どれもこれも新鮮

畦道では

夜の案山子が追いかけてくる
子供の頃に戻っている

考えているもの
生まれて浮かんで
いつのまにかくずれて消えていく
歩いてずっと このまま

淀屋のクロノスの橋

高木 敏克

河の流れをみてみると水になって流れてみたくなる
水はみずうみからながれて自身の否定をしない
なにもしない無意識の生となり淀屋橋の背面に
水しぶきはねかえり無限の反響をあびせると
飛び込み自殺者はじっと水をみる
死をしたらぬ河の流れはほんとうに怖ろしい
あといくつ橋をくぐるのか死体のわたしは

ダムをみてから海をみるまで
あといくつ橋をくぐるのか
眠っている水は見たことはあるが
水になって目覚めていると
街の光は実に哀しい
河面には溺れかけた仔猫のさげび
恋人のささやきが浮かんだままだ

長いひげを生やしたクロノスが
長い鎌をのばして河辺の草を刈り
まったく意味のとれない生の水に

記憶も言葉もばらばらに浮かび
時間という神経がそれらをつなぎとめて
再生しようとしているのがわかる

記憶はばらばらだが物はもつとばらばらだ
ながめると財布や定期入れもながれている
クロノスが必死になって網をかけようとしても
出合いの場に時間はながれ河はながれるが
物のあいだで止まっているのは時間ではない
水だ とクロノスはつぶやく

時間はながれるものではない流すものだ
河には水がながれているが
時計の中に水が流れているわけではない
というのだ

あたえてくれた時よ 消してしまった時よ
もうかえしてくれないのか？

アルフォンス・ド・ラマルティーン「みずうみの詩（うた）」より

もうひとりのわたしが石の上に独りで腰をおろし
いつかそこに腰かけた女の姿を思いだしているが
クロノスはいつてしまった

月と「書付」

高谷 和幸

※急逝した詩人Tの魂のために。

書付を懐に坂を超える。彼は何度も曲りくねった峠道を上って下ってきた。目線の高み、腰の沈み。伸びる手、立ち上がる足。実のところ彼は書付を見たことがないのである、その書かれたものが何を記したものか分からない。単に行くときにあつた頭上の月、帰るときの眼下の月かも知れない。凝視していると、茫洋として眼底の小さい孔へ光が壊れて吸い込まれる。亡失した太古の文字の記憶だらうな、と亡父が言う。首の長い壺の中にくねくねと文字が吸い込まれて、笛のような音、旧家の娘が「オナリ」になられて「くれ、くれ」と呼ぶ声が聞こえる。それは彼を攫いに来た仙女だね、と江戸から播磨に飛んできた寅吉が答える。おまえの書いた「わたし」をくれ、と言う。目を瞑って泳いでいた

彼に思い当たるところがあつた。千種川、揖保川、夢前川と水の傍を通るときに「わたし」を待っていたあの女学生が仙女かもしれない。ある小説家が「わ、た、し」はほとんどが死者だと言っている。それなら書かなくなった「わたし」をやるよ。そう言うと、体が急に軽くなつたが、何かズボンの裾がもそもそする。見るとカイワレ大根がびっしりと生えていた。「これはしめた」今夜の酒のあてにしよう。今から料理をするので、その間にガラス窓を少しあけて、メダカに餌をやってくれ給え。

※「私」の多くの部分が死者なんです。個別の「私」にはわからないはずの感覚、感性、認識を書いている。
…古井由吉「文学の淵を渡る」新潮文庫より。

記憶・反記憶

たかとう 匡子

ひと気のまるでない公園の
錆びたベンチの凹みをしきりにのぞきこんでいる
わたしの眼
の余白に

なにかの手違いで
待ち焦がれた八月が閉じ込められている

たしかその人は葱を洗っていた
死んだばかりの幼な児をふところふかく包みこんで
そこがどこだかわからない
ひとこともしゃべらない
その人は
葱を洗っていた

その先の風景は
と思うだけで息が苦しくなる
大勢の人が死んだのだった

焼けただれた空
燃えかすになって浮かんでいる雲

きょうも
せかいは胸騒ぎのまま
陽が落ちて
忘れられないあの屍臭におい

視線のなかの閉ざした窓という窓をあける
通路があるうとなかろうとわたしは行かなければなるまい
なぜ葱だったか
洗っていたのは誰だったか
日に日に輪郭がぼやけていく
謎というにはあまりにも不確認のまま

柿と夕陽

高橋 富美子

都心から外れたその家にある三本の柿の木は、疎開先の山形から持ち帰った柿の種が育ったと聞く。新婚夫婦の小さな離れを建てるため一本が切り倒され二本になった。南側の公園に面する木戸のそばには丈高い木があり、洪柿だがびっしりと実をつけたので、都会育ちの嫁は慣れない手つきで、舅の獲ったちいさな実を焼酎につけたり干し柿にしたりした。北側の台所の裏手にある木は富有柿でどっしりした幹の低い枝に成る大きめの実は、甘くておいしかった。鳥の餌にと残された実が熟れて晩秋の空に映えていた。

たるんでいた瞼の肉が薄くなり、子どものようにまん丸になった目は黒く澄んでいるが、残された視力ではうつむいても胃の穴に取りつけられた小さなボタンを捕らえることができないから、手さぐりで蓋を開け管をさしこむ。エモールという名のゼリー状の栄養剤を袋ごとひとまわりおおきな袋にいれ、ポンプで空気を送り込んで袋を圧縮し中身を絞りだして注入する。これがすっかり痩せて嚙下の筋肉の堕ちた男の日に三度の日課である。

十一月に入れば西側のベランダからみごとな落日がみえる。ひとに許された命の時間が幾ばくものか推し測ることなどできるわけがない。瀬戸内の海峡に沈んでゆく丸い形が身にしみて親しく思われ、届かないものに手を伸ばしてみたくなる。けれどそれは指の間をすするとすべり落ち、たちまち地球の裏側に姿を消してしまう。

紅い夕陽の残像に、思いついて仏壇の柿をちいさく切りわけ皿に盛る。男は子どもの頃木によじ登り枝から腕いで食べたことなど思い起し、ゆっくりとスプーンでそれを喝いた口もとに運んだ。熟した果実の甘みが痺れた舌にひろがり喉仏がごくり動いた。三か月の間水も食べものも受けつけなかった喉を、柿はすすると通過した。

「戦争のはなし」

たかはら おさむ

空襲の記憶

床について間もなく

突然 「クーシューケーホーハツレイ！」

メガフォンの声

間もなくサイレンが鳴り響く

しばらくするとB29の轟音

叩きつけるような音と同時に

大地が震えて家が激しく揺れる

雨戸を開けるとあちこちで火の手が上がり

夜空からは火の玉が降ってくる

高射砲の炸裂音

取るものもとりにあえず防空頭巾をかぶり飛び出す

安全な場所を探しながら逃げ惑う

やっと国道の暗渠に潜り込む

すでに何人かが身を隠していた

「ココがやられたらオシマイヤナ——」

心細そうに誰かの声

悲壮な思いでひたすら空襲が収まるのを待つ

空襲が解除されわが家のあった辺りに戻る

わが家は見ると陰もなく黒焦げになって

焦げ臭い匂いを漂わせ火種だけが残っている

なすすべもなく呆然と立ちすくんで眺めていた

明日のことなど念頭になく

ただ「生きていたンヤ！」という安堵感だけ！

——しばらくして

「これからどうする？」と問いを巡らす

空が白みはじめていた

——あれから もう八十年近くになる

空襲の記憶は 焼け跡のように燻っている

「戦争はイヤだ！」という気持ちで

子や孫たちには体験させたくない！

あの日の光景が再び再現されないことを祈る

だが「空襲」という時

忘れてはならないことがある

それは僕たち日本人だけではなかったことを

パール・ハーバ奇襲攻撃があった

重慶大爆撃があった

被害とともに加害の記憶も風化させてはなるまい

ぼくが子どもだった頃

ぼくが生まれた年

世界で戦争が始まった

ぼくの記憶にあるのは

敵機に夜間狙われないため

室内の電灯を黒い布で覆う「灯火管制」

爆撃機の襲来を告げる「空襲警報」

けたたましいサイレンにまじり

「クーシューケーホーハツレイ！」

頭を保護する 防空頭巾

不気味な轟音を響かせて飛んで来る B29の編隊

空襲を連想する地名は 紀伊水道 熊野灘

ぼくが子どもだった頃

自由に飛び回れる遊び場はなかった

そこは芋畑や防空壕になった

のびのびと遊べる時間はなかった

いつ 空襲警報が発令されるか不安だった

登下校時に飛行機を見ると指で眼と耳をふさぎ

急いで凹地に伏せた

国民学校一年の夏 八月十五日

その日から 轟音もサイレンも止んだ

静かな毎日と青空が あの日から——

体育

滝 悦子

オカパンと結婚した寺の娘のせんせいが ピッ、ピー
笛を鳴らす

体育の時間みたいに軽快に ピッ、ピー
つきあげた指と

笛が先導する行列は 長く
どこまでも長く

洒落たガウン姿の父は後ろ手を組み

ブラックジョークが得意な叔父といっしょに

おだやかな表情で歩いている

母はまだ来ない

きつと

顔見知りにあって座り込んで喋っているのだろう

それでいいさ、いいんだよと頷きながら

ピー ピッ！

笛の調子が変わると

私の右半身も流れに入ろうとするが

ずいぶん崖を登ったし

懸垂は苦手だから

せんせいの号令には従わないことにする

雲はうす紫色で

その雲の上では風が渦巻く気配

けれど

ここは静かで

ずっと下の流れの先頭に

小柄なオカパン嫁のジャージの白い襟が くっきり

八月の影

武内 健二郎

ベランダに撒いた米粒を
雀が忙しなくついばんでいる
朝

金魚に餌をやり
植木鉢に水を注ぐ
そうすることで
自らもわずかに潤い
いつもの一日がはじまる

出かける前
アメリカのかつての仕事仲間と
フェイスブックですこし話した

終戦記念日だったが
その話はしない
輪郭のない影のような思い出話だ

暑いですね
お出かけですか
隣人の声にただ会釈を返す

外は夏だ
ヒロシマも夏
ナガサキも夏

日傘を広げる
正六角形の影が くつきりと
地面を切り取る

朝 五時

聴こえない 音がする

ことっ ことり

新聞は もう やめたんだよ

この部屋へ配りに来る

配達員は もういない

四年前 更地になった実家も

阪神淡路大震災で 潰れた

母の美容室でも ずっとして

いたんだ この音

生まれてから
ずっと周りにあ
った この音

ことっ こと ぽ.

昼過ぎ図書館に行くと 新聞を

一字 一字 丁寧に読んでいる

老人たち なぜか 老女はいな

い 昔は霞んで見える字をみん

な凝視するのだと思って いた

ことっ

退職した僕も いつのまにか
たくさんの新聞の 重なった時間の
束を愛おしそうに重ねて 見始める

はッ とした

文字とともに 立ち上がる時間と

立ちすくむreiva社会から

立ち止まらない世界へと響くoto

止めてくれない 残り時間の息吹

に転調して 聴こえた気がしたから

幽かな

の 囀りのように

ことッ ぽ.

ことッ

ああ 透明な配達員が

生真面目に配る

oio

ぽ.

ろ しき 早朝

キムさんの浜辺

多田 和生

私の天秤ばかりの片方には、記憶や逝った人達ももう一方の皿には、暮らしの今がのつており何とかバランスをとって暮らしていますがつむじ風に遭ったりすると

上下左右と揺れが収まらなくなりますそんな時は、詩集を抱きしめて舞子の浜に行きます

歌川広重の浮世絵にも描かれた白砂青松の名勝

今は、遊歩道、人工浜に整備されています

一九四九年六月、濟州島四・三事件を

命からがら逃れた金時鐘が

たどり着いた場所でもあります

私は密かにキムさんの浜辺と名づけて心の拠りどころにしています

砂浜に腰をおろし

うすく目を瞑り耳を澄ませていると

大阪湾から淡路島にかけて騒りはじめポンポンポンとエンジン音が聞こえてきます浅瀬ギリギリまで近づいてくる密航船闇に紛れて降り立つのは

筋骨たくましい二十歳のキムさんです傷だらけの影を引きずりながら波打ち際を越え舞子の駅に向かいます

未来に何が待ち受けているか

青年期から壮年期・

季節の折々には嵐に襲われるでしょう

苛酷な今の連続、後悔や怒りに苛まれる記憶

どうやって天秤ばかりの均衡を保ったのでしょうかその背に問いかけると

天蓋のような掌が見えます

烈しい風雨に襲われるたびに

キムさんは崩れかける皿をペンで支えますが

掌から詩人の誰彼が現れては、ともに

ペンをつつかえ棒にしたり

自ら盾になったり

着かず離れず寄り添って護るのです

巨きな掌に育まれた「魂の巡り会い」

「摂理としか言いようがない」「恵み」「救済」

詩を介した美しい星座・

うっとり魅了されるうちに

私の揺れは収まっていくのです

「内、金時鐘『わが生と死』より

そこに蕾を

田伏 裕子

答案用紙の枠に

「美しい理性」と書こうとして

ふと疑いを持つ

枠の中無言に消されていく子たち
焦る

「信頼」と書いてしまう

バツだ

どこにも見当たらない

助けなければ

縛られ動けない

流れる色の点滅

混じり泥となり

捉われ落ちていく

助けて

叫び声にならず

覚まされる

暁闇に見える

「開花」と題されたパウル・クレーの絵

隙の無い正四角形から声は生まれ

ゆるやかに中心に向かうさざ波の

色彩が脈うっている

黒い目も茶色い目も青い目も

美しい薔薇の花びらひとつの舞いを

求め

ただひとつの願いが渦を巻いて

散りゆくばかり

天空亡所

玉井 洋子

翼下

渺渺

死屍累々

機銃掃射に撃ち抜かれた薙のように

ほこぼこ穴あのあいた雲

天空漫步の夢を見させてくれる白雲層はどこにもなくて
葬りのあとの

墓所

亡所

ガクンと高度をさげていく

小窓にズームされてきた

瀕死の雲が水になろうとする刹那

大気のはてりや塵埃が

もうこれ以上はという

極限まで吹き上げられて雲になる

雲は雲の上に雲を重ねてみずになる

自らの重さに耐えきれなくなつて
おちる

おちるちからで引きちぎられ

垂れ下がった雲のきれはし

こうして大地にふりそそぐ一尖は
ところによって

慈雨となり

時に荒ぶるカミであり

そして千年万年が過ぎ

かの夏の日のエトランゼも

宙をただよう微塵のひとつぶになって

銀河の深い闇のどこかから

青くかがやく

みずの星を

みているのかもしれない

ヤスクニ

玉川 侑香

今夜は

飲めや歌えの 無礼講

肩組んで 軍歌 歌うて

隠し芸の飛び出すもんも おって

さあ 杯や 杯や

杯を 口いっぱい空けながら

大声で わめくヤツも おった

あのな

そやけど 酒 ちゃいまんねん

水

水 ですわ

別れの 杯

あしたは 三人

特攻の飛行機に乗って

飛び立ちますねん

この連中は

その後に続くもんの集まりですわ

宴の最後に

ひとりが オレのところへきて

手 握りしめて 言うんや

ハチロー

ヤスクニで ヤスクニで 会おうぜ

夜中

山の上の宿舎から

大声で叫ぶ声がする

おっかさーん

おっかあー

おかーん

三度叫んで 静かになった

翌朝は 晴天

飛行機が 三機 オレの頭の上を

海のむこうへ 出撃していった

あんたらは

靖国 反対 反対 と言うけんど

オレは 死んだら ヤスクニへ行く

あいつらと 約束があるんや

あいつらと

ヤスクニで会う約束が あるんや

(堀ノ内八郎氏からの聞き書き)

晩鐘

辻岡 真紀子

ふいのめぐり逢いだつた
開いた雑誌の一ページ
挿絵になったミレーの画^えから
蓋を開けたオルゴールのように
突然に聞こえてきた鐘の音

色褪せない残照の果て
地平線にわずかにのぞく教会から
千畝を鳴り渡る晩鐘に
一日の収穫を終えた野良着の夫婦が
祈りを捧げている

あらゆる物音は遠のき
時空を超えた音色に
私も心の音を重ねていた

それから私は聞く

一日の勤めが終わり
去りゆく陽が西空を名残惜しげに染め上げる時刻
ビルの海に
明日への約束の代わりに鳴り響く
幻の晩鐘を

やがて鐘の音は夕陽を追って消えてゆく
私も辿る
音なき音色に導かれ、いつもの家路を
いずれ
ささやかな一生の収穫を終えて
誰もが向かう
見知らぬ鐘楼へとつながる路を

コードレス

掃除機をコードレスに買い換えた
あゝ何て楽チン
持ち運びカンタン
どこでもドンドン

こんなに便利なら
もっと早くに買い換えりゃよかったかな
片手に掃除機、片手にコード
コンセント探して、差したり抜いたり
繋いで外して
そのうちコード絡んで、掃除機引っくり返す

このさいだから
私もコードレスになっちゃおうか
生まれ落ちて、へその緒を切ったとたん
たちまち絡んできた拘束^{コード}
出自、性別、役割・・・みんな断ち切って

さあ、還暦の再出発

息子はとつくにコードレス？
たまに帰省、たらふく食べ、たらふく眠り
しつかり充電、笑顔で帰京

やっぱり私はここに居る
心の絆^{コード}は外せない
ときどき延長コードでハネ伸ばし
繋がる幸せ噛み締める

飛鳥路

津田 真理子

1

ふっと明日香村を訪ねたくなった。連休前の平日に飛鳥駅に降り立った。歴史公園を歩いて高松塚古墳へ向かった。新緑に輝く森林を行くと鳥たちの声がふってくる。ウグイスもホーホーケキョと鳴き慣れたものだ。壁画館で模写を見る玄武（亀と蛇の造形）のモダンなタッチにエネルギーを感じた。大陸風の衣装を着た女性群像からは語らい合う声が聞こえてきそうだった。どんな方が埋葬されていたのだろうかと思いつつながら小高い二層になった古墳をながめた。

2

飛鳥寺を目指してバスに乗る。二十分程で着いた。日本で最初の壮大な伽藍は焼失し、江戸時代に再建された寺には、止利仏師によって造られた日本最古の仏像がおわした。しばし有難いお顔を拝した。寺の近くには、蘇我入鹿の首塚があつ

た。飛鳥仏は血生臭い古代史を見守ってこられた。ずっと今もだ。辺りは田園風景が広がる。用水路がチヨロチヨロ流れ水の香りが上がってくる。よく見ると小さなタモロコが泳いでいる。レンゲが一面に咲いている。レンゲはね。お百姓さんが種を蒔いているのよ。と母が言っていた。子どもの頃春にはレンゲを一緒に摘んだ。レンゲの咲いている畑の畔には草を焼いた跡がある。農の営みを見る。

3

明日香村を初めて訪れたときのことを思い出した。当時仕事と学校で殺人的なスケジュールの中。うなっているコンピュータにはじきとばされそうな職場の空間から解き放たれずむ田んぼの中に。飛鳥寺が浮かんでいた。大根をぶら下げた農夫に帰り道で会った。土のついた大根と長ぐつ。しっかりと大地に根をはる姿。シルエットは晩秋の夕闇にとけこんでいった。四十年近く前のことである。あの時のまま在ることがうれしい。今また時を越えて脈々と受け継がれてきた日本の原風景に包まれている。

からみとられた

寺田 操

蜘蛛の糸。

朝陽をうけた障子にあやしい影 あのかたちはクモにちがいない 掃き出し窓をあけて追い出そうとしたが するりと網戸との間にもぐりこみ レールのなかに隠れる 障子を開け閉めして鬼ごっこ 退出してもらって ほっとしたのだが バルコニーにでてみると あちらこちらに巣がはられていた その朝からだ 音もなく出没する くもとの 格闘のゴングが 鳴ったのは 目を凝らして 巣がないか点検する カゴいっぱいの洗濯物を 干しながら 目の端に透明な糸がとまると 作業の手を止めて 植木鉢の支柱で からまる糸をちらす 黒いクモは しかし あれから 姿をあらわさない 雲隠れ。

不覚。

美しい！と思ってしまうた 透明な糸の模様の奥に 地下街が 編みこまれていた 蜘蛛の糸のアート作品だ かぎ針を動かしてレース編みする 母のなまめかしい手の動きが重なる「一晩じゆう、月の名によつて、彼女は封印を貼りつけているのだ」(ルナル「蜘蛛」『博物誌』岸田国士訳)のみごとな喩。

恍惚。

大きく張られた蜘蛛の巣を指してほら、美しいでしょう 女友達の陶然とした表情がよみがえる 木立のなかの一軒家へ招かれた夜 空き地に車を止めて玄関へむかう小さな坂道 樹々のあいだに張られた くもの巣は 彼女の現身のように思えた 乾杯したワイングラスに クモの影が……。

二文字。

蜘蛛 クモ くも 本棚にするする のぼっていく二文字 たどりついた場所 は 谷崎の短篇「刺青」(『潤一郎ラビリンスI』)だ。表紙画(和田誠)には 洋館が建ちならび レンガ橋と街灯のあいだに クモの大きな八本の肢がはりついている 網目のなかに描かれたモダン都市 背中一面に刺された「女郎蜘蛛」の形象をめぐる 男女の 濃くからみあった 明治四三年の息。

疼き。

刺青師は 夏のゆうべ 料理屋の門口に待つ駕籠の簾から 真白く巧緻な素足をみつめた 足にも表情がある 顔がみたい 娘をさがして五年目の春 男は娘の背中に己の魂を刺しこんだ 「苦しがるう。体を蜘蛛が抱きしめて居るのだから」と 彼女は「美しくさえるのなら、どんなにでも辛抱して見せましようよ」痛みに耐える 肌を刺す針 皮膚の深部に刷りこまれた命の一滴 刺青完成の翌日「お前さんは真先に私の肥料になったんだねえ」娘は瞳を輝かせた からみとられたのは男の魂 刷りこまれたのだ 娘の肌。

カラスとわたし

土居 靖子

出番を待っていた太陽が
これ見よがしに放つ光線
まちが乾く
わたしも渴く
日光浴を悦ぶカラスは
びんつけ油を被ったのか
艶々と
わたしの背丈の止まり木で
仲間の声にキョロキョロしている
近づいても逃げない
姿勢を正した
にらめっこ 挑んでいる
誇らしげに胸を張るカラス
なにより その黒光った姿色に釘付けにされた
髪染めしたばかりのわたし

遠い木霊——K・Kの舞踏のために

時里 二郎

どこから来たの
という遠い木霊のなかを旅してきた

旧世界の生き物の生きる術の絶えた世界に
いることの不思議をかみしめるように動いてしまう
踊りでも 舞でもない
森の魚のからだ

神の河の水脈を遡る森の時間に
もはや途絶えた旧世界の音信が混線する
誰もそれに返信できないうつろを
そつといつくしむように
見つからないように
あなたの足裏に隠してある
旧世界の時間の音沙汰

見えないものにだけ心をゆだねることができると唄う古雅なアリア

聞こえないものにこそ手を翳して——とささやく壊れたラジオ
途絶えた旧世界の遠い木霊の身体であるあなたは
植物の睡眠の縁をなぞる旅のみちくさに
時おり
ここに立ち寄り
ここに目覚める
木霊

——二〇二三年夏。姫路の小さな会場で、神河に住むK・Kの舞踏の（振る舞い）
を前にして言葉を紡ぐ試みを行った。そのおりの散らし書きに推敲を加え
浄書した。

うつくしいということは
とどまることを知らない永遠

うつくしいということは
流れの最中に煌と目を射る一生の光り

うつくしいということは
歯切れよく心寄るものへ「是」と通すこと

うつくしいということは
在るべきものではなく在るもの

うつくしいということは
眺めの中に居させないこの胸との
道を歩いて行く幻を現にする心の開き

うつくしいということは

わたしはあなたに頷くこと

うつくしいということは
あなたが私に笑いこぼすメロディ

あふれて
粉々のあらゆるものを掬い抱え
それらすべてで

此の胸を歩き来しておいで
ああ
空は里を洗うように青い

愛だけが吐き出されてはいけない
その影に何があり
それは心の何に根を張っているのか
すべてを晒すことはない
ただ うつくしくあれすることを
うつくしく受け入れることなのだ

浜風になる

永井 ますみ

家族みんなで早起きして歩いた
堤の傍で朝顔を摘んだ
分校までなんべんも歩くほど歩いて
もつともつとあきるほど歩いて歩いて
汽車に乗った
まだあ
汽車をおりても
おばあさんの住んでいる浜の家へはまだまだ歩く
砂土の上に咲いた花を見ても摘む気にならなかつた
まだあ
照り返す夏の光に おでこも背中もぐしより濡れる
コンクリで固められた川を辿って歩いた
まだあ

よう来なつたなあ
浜のおばあさんが かどぐちに立って声をかけてくれる
土間を風が抜けていく

うちらあの家を「山」って言って
春には笹を 秋には盆花を採りに来るおばあさんだ

このごろは腹が痛くて山にも行けんだ
母ちゃんの前に痩せた脛をゴロンと出し
足の三里のツボを教えている
脛の下を少し下がった処
ああ イタイタ
そこに やいとをすえてごせ

子供だけで海に行ったらいけん
遠いところに行ったらいけん
川の傍であそんだらいけん

いけん いけん と言われて
うちら子供は
おおきく開いた浜の家の
表口から裏口へ
裏口から表口へ
駆け回る浜風になっている

歓声と静寂

中島 友子

小学六年生の孫の運動会へ行く
運動場には一家族二人の人数制限のため
道路沿いの生垣の隙間から見ることに
ふと道路の反対側に目をやると

戦死者の多くの墓

終戦間近に失われた若い命

十八歳 昭和十九年十二月十九日 東支那海方面

二十二歳 昭和二十年五月五日 沖繩戦

二十二歳 昭和二十年四月二十日 此島北部ルソ

ン島サクラサク峠

三十三歳 昭和二十年六月十八日 沖繩

二十三歳 昭和二十年八月十六日 ミンダナオ島

二十四歳 昭和二十年七月十日 ヒリピン

死の報告を受けた母 家族の慟哭

頼りにしていた息子を失った戦後の生活苦

立ちすくむ

道路を隔て

歓声と静寂
平和と戦争

責任

蛙の合唱が聞こえるようになると

わき芽は

お母さんトマトから離されて

畑の隅に植えられました

小さくてどこに居るのかわかりません

蝉が鳴き始めるようになると

他のトマトは

一斉にいっぱい実をつけました

そして わき芽のトマトの噂をしました

小さくてみすばらしいね

かわいそう

なんといつてもわき芽だもの

私達とは違うのよ

お母さんトマトは

黙ってじっとわき芽のトマトを見つめました

祭り太鼓が響くようになると

わき芽のトマトとお母さんトマトを残して

他のトマトは

いつの間にか姿を消しました

わき芽のトマトは

ふさふさというわけにはいきませんが

胸をはってしっかり実をつけています

お母さんトマトに

命をもらった感謝の気持ちを伝えたい

責任を果たしている姿を見て欲しい

と思つてふんばつてきたのでしょ

うお母さんトマトは

背が縮み カラカラになりながらも

わき芽のトマトを見守っています

鳶の葉が紅くなる
 夜も長く深くなる
 月も冷たくなっている
 細い月には蟻ぐらいしかない
 その蟻がばらばら落ちてくる
 蟻食いの群が口を開けてじっとしている
 長い体毛と体臭が靡いている

古い街灯が瞬きを繰り返している
 待っているそのことすら忘れた人が
 あくびをしている
 そのあくびに苔が生える

「最終電車はさつきいつてしまいました」
 夜にのびる線路がぐにやぐにやと
 寝返りをうつ時間
 鳶の葉に覆い尽くされた廃院が

ぐにやぐにやと通院者を集める
 通院者はあの頃と同じように
 腰をさすり
 目をしょぼつかせ
 待合室の長椅子に腰を落とす
 「どっころしょ」

あくびが蔓延する
 皆マスクをしている
 薄汚れたマスクが
 数秒ごとに
 しぼんでふくらむ

咳がときどき隠れてされる
 囁きもときどき隠れてされる
 コオロギの鳴き声も途切れている
 しみだらけの座布団が忘れられている

廃院のドアが開く
 骨がはみ出した男が出てくる
 街灯を見上げる
 またあくびをしている
 またあくびをしている
 帰る場所はこの街にはもう
 待っている人はこの街にはもう
 街灯にはいろいろな蛾が群れている
 落ちてじっとしている茶色の蛾がとくに大きい
 目が逝ったあの人に似ている

土砂降りで飛べない夜に
 よりにもよって
 その口は現れたかもしれない
 マスクが落ちている
 耳掛けのひもが片方切れている
 風もないのに
 紅い鳶の葉がしきりに落ちる
 通院者が落葉をかさかさ踏んで
 今夜も

蛾に混じって
 使い捨てられたマスクも飛んでいる
 誰かの口をさがしている
 その誰かが街灯に誘われるまで
 臭いを出して待っている
 月は細い

待てない夜もあったのだ

チェックの服をきた少女

中堂 けいこ

女児の像が立っている なにか私に言おうとしているようだが
声がとどかない いや発語以前にとまっている
その静止のまま たぶん息を吐いているのではないか
あたりの空気がわずかにゆらぐ

少女はまだ幼い 母親の古着を仕立て直したような
レンガ色のシャツとチェックのジャンパースカートを纏っている
丸い衿は懐かしい

クルマウの少女は右手の指でスカートの布をにぎり
いっしんに正面を見ている 見ると言う両眼の斜視が
なおいつそう虚空をとらえ そこでとらえられる

名もない大人の いくさ やまい

死のはざまで 廃墟をみあげ 指をかさね

かぞえる 少しずつふえる 格子縞の布地をぬうふしくれた細い指
丸くカットを入れ裏布を寄せていく

私は斜めから伺い見ることしかできない

やわらかい人肌の石灰をなだめる作者の手技

頭部から深い吐息がもれるように 少女はデッサンから立ち上がる

時制がふくらみ 私たちは少女の像とその背後から

なにひとつ変わらないこの地上の はしほしをめぐる百年を

こぼれでるままにここにいるのだった

時制に耐えられず 私は少女の像をファイルにいられたまま

何日も だが忘れない 少女はずっと保存のなかで

満開の桜の画像のとなりで たまにほんとうにたまに

桜の花を見上げているようだった

花びらが服に付いていることがあった

注釈 犬島プロジェクトに出品された人形像『チェックの服を着た少女』より。

エゴン・シーレは少女のスケッチをクルマウ（現在のチエスキー・クル
ムロフ）時代に描いた。人形作家の宮崎郁子はシーレのチョークデッサ
ンから、色彩を想定し人形に仕上げる。チェックのジャンパースカート
にレンガ色の丸衿のブラウスも制作。モデルの少女は四、五才か。靴や
服飾品などから裕福な家庭の子女と思われる。

ウズベキスタン

タシケント日本人墓地にて

西海 ゆう子

もしかしたら貴女の父親だったかも知れない
夫だったかも知れない息子だったかも知れない
第二次世界大戦末期極東ロシアの捕虜になり
遠くこの地まで移送され強制労働を課せられた
この地の気候は尋常でなく酷暑と酷寒
食べ物とて満足に与えられない中病気や怪我で生命を落とした
その中に植民地出身兵士がいたかどうかわからないが
死者たちを哀れんだムスリム、イスラム教徒は
異教徒を丁寧埋葬り今も墓を守る

しかし戦争で前途を奪われたのはここに眠る兵士たちばかりではない
国に残された妻や母や子どもたちが
敗戦後どれほど辛苦を味わったことか
夫がいたら 息子がいたら 父がいたら そんな嘆きに溢れていた
常により弱い者がより辛い目に遭ってきた

中央アジア・ウズベキスタン・首都タシケントのナボイ劇場は
一九四七年日本人捕虜の力で完成し
一九六六年タシケント大地震で街が崩壊する中でも残り
日本人の丁寧な仕事を称える石板まで残されていた
そして日本人墓地に整然と並ぶイスラム式墓碑は
炎天下熱く燃えていた 冬になると今度は冷たく凍てつくのだろう
葬られた兵士たちはどんな思いで生命尽きたか
墓碑に漢字で刻まれた名前と出身地
帰りがかったに違いない

既に鬼籍に入った伯父たちも
皇軍兵士として戦場から生きて戻って来たが
当時のことは何も語らないまま逝ってしまった
死して語れず生きても語れず
ましてや戦場にされた人々の傷の深さを思う
時が過ぎ受難者が死に絶えればなかったことに
いや戦争は今も続いている
国を守る正義を唱えながら武器を造れば儲かる ただそれだけ
犠牲になるのはいつも決まって弱い者 女 子ども 老人
どうか巻き込まないで
人は人らしく生きるために生まれてきたのだから

春 来る

野口 幸雄

日曜の午後三時 ある書店で
知人を見かけた

初老の紳士
遠い昔 奥さんと死別したと聞いている

熱心に本を読んでいる
気がついていないので 声をかけるのをやめる

そこへ これも知り合いのご婦人が現れた
書棚の間を覗き回っている

見つけた そつと後ろへ
背中をトンと叩く 紳士はビックリ

学生みたいな待ち合わせ
二人微笑 本を書棚へ

映画にいつてそれからディナーか
これはうらやましい

素敵な詩を読んだような
日曜の午後三時 ある書店で

地球号

野元 正

いつになくもの憂い今朝 雨戸を開けながら
今日もあてなく彷徨よう 海へ行ってみよう
思いつくもいつの間にか どこかにおしやる
今はちよつと休憩中やと 忙しく言ってみる
どうもこのごろぼつーと 時間は針を進める

いつになくけだるい午後 海を見つめながら
このまま老いていいのか 自問の刻を過ごす
自墮落でいいじやないか 身内から声が響く
今のままじやいけないよ おもいが萌え立つ
海の上を白兎が跳んでる 風が強く叫んでる

夥しい白兎の群れが飛ぶ 何の兆しかと思う
今までいいことなんかね 無かったよという
無いなと思つたら無いよ あると思いつけよ
白兎の群れと先鋒を競う 先を越してもなあ
どうにもならないからね 途中でへたばちや

海の潮目が変わるようだ 明るい兆しだよね
耐えて堪えてよかつたね 黒龍雲に貫く斜光
陽光は空から海へと射し 幾筋もの天使の階
海原は泡立ち生けるもの 期待を膨らませる
陽光が暗黒の海を色彩り 歓喜の海に変える

海の生けるものは集い来 萌え立つ命の息吹
海底から沸き立つ命の柱 全てここに始まる
生命が生命を繋ぎ生きる ただ感謝しかない
一つの生のために夥しい 命が潰えて消える
連環の頂に座る人の奢り そは神々への冒瀆

午後の海を孤舟が過ぎる 独りその陰を追う
午睡をむさぼる人間の性 どうにもならない
まだ間に合うと祈る人と もうと……憂う人
ただどうすらいいのさと あわてふためく人
宇宙船地球号はよたよた 泊まる津なく飛ぶ

やがて陸は海底に沈むか 地獄の午後に……

穴かがり

橋本 千秋

出掛けようとして取り出した秋のコート 胸の辺りにポツンと穴が空いている 義父がいてくれたらと思う

義父は終戦で フィリピンミンダナオ島から 家族が疎開していた敦賀に帰ってきた 紳士服の仕立て職人だったが 布地も糸もなく ミシンがあつても何も出来なかった 四人の男の子を育てるため工場勤めを始めた 義父の夢もあつたのだろう 子ども達が学校を卒業すると次々と大阪に送り出し 四人のうち三人が仕立て職人になった いつか子ども達と一緒に思っていたのだろう 数か月に一度 大阪に来て仕事ぶりを見て帰ったという 定年になって大阪に来たが その頃は 紳士服も誂えの注文服から既製服に代わり 店を持つ夢は叶わなかった それでもミシンを手放すことはなく 玄関脇に「かけつぎ

穴かがりします」の看板を上げ 近所の人達や私達の洋服を直し続けてくれた 一人っ子で温和な人だったが お酒が入ると時々人が変わった 義母は戦争から帰って来てからだ というが 戦争の話を読むことはなかった 戦争で義父の胸に空いた大きな穴 お酒が入ると その穴からミンダナオ島が見えるのだろう 窓際のミシンの前で 小さな穴をかがり続けた義父 胸の大きな穴はかがることは出来ただろうか 背広姿で旅立った顔は穏やかだったが

眠らない夜に

八田 光代

土曜の夜
早く眠ってしまうのは
勿体無い
濃い緑茶を飲んで
考えることは
何
返されたレポートの
赤い下線を指でなぞっても
新しい答は
浮かんでこない
分厚い辞書を開いても
探す言葉には
辿りつかない
新鮮な閃きを
期待しても
錆ついた扉は
開かない

冷たい風を吸い込むと
奥歯の治療痕が
痛み出す

ソフトクリーム of 幸せ

馬場 秀司

とあるセルフサービスの喫茶店
小さな男の子とママは
ソフトクリームを頼む

くるくる巻いた冷たい誘惑
そこへ男の子に危機到来
手のソフトが崩れ落ちそう

でもママはにっこにこ
水飲みグラスを持ってきて
ソフトを逆さにポトン
スプーンを手渡して
ほら 食べやすくなったでしょう？

ところがどっこい男の子
今度は「ママー コーンがほしい」
はいはいはい

紙ナプキンでコーンを包む
にっこにこ百倍の男の子
あっという間にソフトも完食

素早い動きと機転 ママのファインプレー
男の子は ぐずる間もない
まわりのお客さんは
心のなかで大拍手

食べ終わったと思ったら
ママは左腕で男の子を抱きかかえ
買い物袋を手に さっそうと店を出て行きました
ランウェイを歩くモデルのように

柿

浜田 多代子

柿の木は登ったらあかん
裂くからすぐ折れる

父は言った

ナツモノネリ ちよつと小ぶりの実

砂糖がいっぱい詰まった堅い柿

早なりで運動会の果物なんじゃ

父は鼻の頭をつるりと撫でた

竹の先を割って小さな木を突っ込んだ

簡易柿取り木は便利

高い木を見上げると

空が目にはパチパチとまぶしい

ヤヘイ 甘いのと渋いのが半々じゃ

父は落ちてきた柿を手の中に包んだ

背の低い柿の木が数本あった

フウユ これが一番おいしいんじゃ

大きいの生らそうと摘果したらあかん
いっぱい いっぱい生らしたるで

ええんじゃ ええんじゃ

小もうてもええ

ようさんなつてくれてありがとうな

一つ取るとズボンの端でくるとふいた

竹と琵琶の木に囲まれた ヤブヒラ

冬を過ぎて二月まで実のなる優れものじゃ

実は白っぽく甘さは控えめ

父は堅い実をがぶりと食べた

私も真似をしてがぶりと食べた

前歯で食べた

レールのような跡が付いた

気分がよいと鼻の頭をなでる癖のあった父はいない

老木になったナツモノネリは今年も小さな実をつけた

里の柿の木は健在だ

ありがとう

私が鼻の頭をつるりと撫でた

夏の終わり

原田 ひでよ

明け方 夢をみた

網戸を動かなかったセミが
突然舞い降りた鳥をかわして
宙を飛んだ
逃げるちからも残っていたのだ

夢から醒めると

セミは

網戸にたどり着いた時の姿で
息絶えていた

ポトリと落ちるのでなく

息あった時のまま

ぎゅっと その裾を握り締め

わたしが

つかまってしがみつくのは
やり残したあれだろうか
ついに叶わなかったあれだろうか
愛して止まないあれだろうか

ありったけの力をふりしぼって

離さないまま果てようとするのか

首は今いる世界の方を向きながらも

想いを残さず

ちからも残さず

脱け殻だけ置いて

あちらへ渡りきれるか

ウクライナでは

チェリストを志す学生

弾く たったひとつのことのために

戦火の街にとどまっている

オーケストラのオーボエ奏者

軍の音楽隊で

銃を握る

合唱団の少女

壊されたもの 壊されてはいけないものを
伝えるために 歌う

わたしに

問う

弾くために 戦禍に留まるか

楽器を置いて 武器を手取るか

失ったものを

音に乗せるか

人生設計

平岡 けいこ

重力に逆らい
共存する

人間の夢のかたちなのだ

大地に一本の棒を立てると

日時計になる

光と影を操りながら

ステンレスの窓に光を集める

光は人を救うから

夜を照らす照明器具

昼にまたたく星

みえないものは尊く

自然のあるべき姿は

完璧に美しく

絶対的に正しい

私は一本の線を引く
一本の道

この線がゆるぎない基本

より太い線を引き伸ばし

さらに細い線を足して

立体化する明日を展開する

私達はいつか

土に還る存在

その短い軌跡を守る為

きみの頭上に

虹を架けよう

山崎冬夏抄

福田 知子

*カワラナデシコ

歩いてきた道に突然のように咲いた記憶の花
サイダー・ブルーに染まってゆくひとひらの雫
長く続く道から眺めた遠い日の映像が
消えゆく夕陽のなかに揺蕩っていた
掛保川沿いに歩く夏の足音――
人と自転車だけがときおり行き交う河原沿いの道
炎暑をぬってうねるように咲いていたカワラナデシコ
白とうす桃色の透ける花びらが川風に揺れていた
抜き取っては麦藁帽子に刺して
焼けそうな真夏の道をゴム草履であるく
半分土で半分コンクリートだった道も
アスファルトになって黒々とテカっていた

*ヤツデ

てるひろちゃんは背の高い痩せたがっしりした人だったなあ
お母さんの愛子さんとお婆ちゃんは
古い銘仙の綿布団を掛けた掘炬燵で
よく二人でコップ酒を飲みながら昔話をしていた
いつ遊びに行ってもなにも言わずに迎えてくれたから
日が暮れてもトランプしたり話つづけたりで 眠くなる
てるひろちゃんのそばに蒲団を敷いて寄り添って寝ていた
私も従姉妹たちもそうして夜更かしを愉しんだ
木の格子の歪んだ硝子窓からはヤツデが大きな手を広げていた
濃く厚い緑の掌は天狗の団扇のようだった
押入れの襖をあけると四角く切られたトイレがあった
トイレは土間にもあるのに不思議で仕方なかった
夜中に行くと堕ちそうで怖かった
襖を閉めると硝子戸がカタ、と鳴り
葉群れの下から覗くと深い皺の奥に光る青黒い目があった

時の夕ネ

福永 祥子

しばらく待ってしよう

見えてはいるが

聞こえてはこない

聴こえてはいるが

視えてはこない

何かを開くために

何かを閉じる

私はここにいます

と叫んでみても

ここは 何処？

誰もいない場所で

わたしは やつと

日常を 脱ぎすてる

支え合いながら

実は奪い合っている

浮かび上がってくるものは

捨てたはずの私の影

記憶はすべて曖昧で

辻褄を合わせるだけのために

さっさと片付けてしまう

今日も昨日も一昨日も

やがて

私の為だけに訪れる

静寂な黄昏時

どこか 深いところで

鳴り続けているベルの音

リーン リーン リーン

・・・

おいしいオレンジジュースの作りかた

藤本 紘士

駅の中に、生搾りオレンジジュースの自動販売機が設置された。

直方体の筐体の上半分は窓になっていて、

いくつものオレンジがぎっしりと積まれ、光を当てられている。

——ご覧のとおり、これらはとてもみずみずしいです、つやつやで。

言ってみればオークション会場、にも似たミスコン会場。

品定めする男たち。

もちろんここには老若男女、無差別に押し込められている。

かろうじて息はできる。

支配と暴力の象徴としての。

さながらガッサーン・カナファニーが一九四八年四月の歴史的な出来事について「悲しいオレンジ」と刻んだような。

ジャッファ・オレンジ。

——でも、安心してほしい。ここに集められているのは、アメリカやオーストラリア産ばかりです。アメリカの優秀な（人体に影響を及ぼすほどの）農薬をふんだんに使っているので、

どんな長距離輸送でも黴はいっさい生えません。

ほかに康蒙九たち^{カンモンク}が漢拏山^{ハルラ}に籠り、大阪で金太一少年^{キムタイ}が警官に射殺された、一九四八年四月。筐体の投入口に五百円硬貨を入れる。窓の向こうで機械が動きだし、

たまたま落としやすいところにいた四つのオレンジが落とされる。

回転する機械に捉えられ、真つ二つに切断され、果肉を力強く搾られる。

——いいえ、安心してください。見ようとしなければけっして見えることはありません。見なければいいのです。

筐体の窓からは、底の一部に捨てられていく搾りかすも含めて、その様子がありありと窺えてしまう。

——大丈夫、安心してください。見てしまったとしても、中で充滿しているにおいは漏れ出てこないし、果肉が潰される音、余った皮が捨てられる音が聞こえてくることはありません。

取り出し口がひらき、私は上部に透明のフィルムが貼られた紙コップを手にする。

オレンジの果汁でずっしりと重い。

筐体に備えつけられているストローを一本取り、フィルムに突き刺して、できたてのオレンジジュースを吸いあげる。

オレンジのさわやかな香りが、さっきまで考えていたこととともに、鼻の穴からすっきり抜け出ていく。

とてもおいしい。

(了)

ちいさな動力船が
アンダンテの音楽のように
沖に向かっていて
みしらぬ水平線が
くれずんでいく空と海を分けている

むこうの埠頭では
低層の倉庫が連なり
空に突き刺さったクレーンが
つめたく水平線と対峙している

僕がいるのは
海の時かん

——デヴォン紀の海に棄てられた
——時刻表だな
——僕は

一匹の魚が
夕やみのなかで跳ね
かすかな水音とともに又海にかえっていった
誰もいない
しずかな夕暮れの埠頭で

気候

夏の午下がり
街なかをあるく
きいろい砂漠をあるいているようだ
とおくの高層建築が蟹気楼のようにぼやけていた
23度26分ほど
地球はかたむいている
(巨大隕石との衝突で?)

そんな地軸のかたむきが
赤道付近に熱帯をかたちづくっているそうだが
いまやこの熱帯は
ぶきみに回帰線を超えてひろがっているのだ

海は鬱々とデジタル温度計を啞え
砂漠は熱帯雨林と交わっている

熱帯生まれの
あたらしい人類!

僕たちは
始終温度計をみつめ
心の砂漠と思考の熱帯雨林が
たえまない眩暈をもたらしつつづけるだろう

海は
しずかに迫り
サファイアの水平線が
異様な高さで
にごった海とくらしい蒼穹をくぎるだろう

ひろがる窓

牧田 榮子

ボードセーリングのお稽古は汀を離れ
漁船の一団が黒雲をくぐっている
西を目指すカーフェリー
でっかい浚渫船と小さなタグボート
梅雨の朝 水平線の規律
降下してくる旅客機の灯り
アオサギが餌場に向かった
大阪湾の日常はとっくに繰られ
白いノッポビルの*あきらかな輪郭
茅渟の海を探るでもなく見張るでもなく

異国の騒動をテレビ速報に知らされる
告白することははじまること
いつも背後に映るあのオベリスク
朝食の香りがなじまない
歴史（おっかない）に彫られ
物語（とくべつな）になり

つながる空よ 続いている海よ
新しそうな色を混ぜて
まことしやかに千尋を辿る
かつてのそこで
いつかのこども

風がたんまりひろがる窓
挿し木の紫陽花が咲いたよ
黒雲は去るのか留まるのか
外国船が南へ遠ざかっていく
いそがしいいつもの朝
白いノッポビル
造作もなく

*りんくうゲートタワービル256、1メートル

過失——亡友Uに

増田 まさみ

不用意な鼻孔ふたつ
まだるい嗅覚なのだ
なかんずく夕靄の

水玉模様のハンカチに
月下の咆哮を包んでみる
センソウに負けた父らの
声なき声に身罷られた
ともがきの詩を

徒らな^{いたず}

歌枕・たむけばな
やつがれの

夜明けが
またやってくる

小川を抱いて

小川を抱いて
逝ったははよ
だからわたしも
笹舟を紡いで渉る
清貧のははが
黙って
そうしたように

水たま

松浦 三津子

水たまの中の世界がゆれている
ゆらり ゆらり 音もなく
私の息の中にもまざる
水たまは火のよう
それがあまりに冷たいので
私は涙をながしながら
水たまをはき出してしまった

オシロイ花

松下 玲子

五月のある日 百年以上前から植っていた
松の木を 四メートル程残して伐採した
青い空に映える枝ぶりは見事だったが
落ち葉の掃除は大変だった
それでも 震災時には はびこんだ根が
家を守ってくれたように 感謝している

夏 根元には いつも背高く 次から次へと
オシロイ花が咲く
赤 白 黄 深紅 橙色 紋入りもあって
花も実も ツンツン飛び出すようにして咲く
いかにも アメリカ原産の多年草らしく元氣
夕方から咲いて朝はすぼんでいる
黒い果実の中には「胚乳」おしろい粉
子供が面白がって遊ぶようだ

余りにも暑い夏だったので

気がつかなかったが ある日 根元一面に
サルのコシカケ風の大きな物体が潜んでいるのを コンコン 堅いよ
乳白色にうす茶色の層をなして
負けじと オシロイ花は
穴 穴 穴 明けて 飛び出し咲いている
見とれる老いの身に 贈りものかも

マツノカタハタケ
ほのかなカステラ風の甘い匂いする
行き場無くした樹液のなしたわざなのか
何故か美しい風景
小さなわが庭の片隅で
小さな妖精登場の
舞台 幕開く

木は詩が好き

丸田 礼子

強烈な台風がきた
根元から 折れてはいけない
倒れてはいけない

天地の

ありったけの物語を

聞かせてくれた

遠い眺めを引き寄せてくれた

抱きとめてくれた

吹きすさぶ風に

激しく揺れ 踏ん張りながら

木は 自分に向かい

紡がれたことばを噛みしめる

なん度でも なん度でも

狂乱の夜

幹を ことばが

樹液のようになげ巡り

生き抜く意思へと

重なって 広がって

溶けていく

嵐が海に去り

朝

光にすがれるとき

生きている

木も

わたしも

光の中で

水こし 町子

一万人が第九を歌っている
光の中の神は きつといらつしやる
兄弟よ抱き合おう
大声で歌ってる

山の中から出てきた大昔の骨
頭蓋骨にはヤジリがささっている
腰の骨も割れている
いつも大昔から争いはあり
人は殺されてきた

父は満州から戻った
盲腸になり後方で治療している間に
部隊が全滅していたと何回も聞いた
戦っていた話はしなかった
最後まで父を理解しなかった
名古屋のテレビ塔の広場で

樺美智子さんの追悼集会に参加した
父は何も言わなかった

旅でモスクの中を見学した
頭を床につけて
若者たちが祈っていた
祈っていた若者も兵士になる

明日

戦いは終わる
前触れもなく突然終わるのだ
大きな穴の中にたくさんの
亡くなった人を埋め
なにも無かったことにして終るのだ

会場いっぱい一万人を映して
第九の歌は続いている

遠い日の少女Mと少年Kの物語

室井 正彰

太平洋戦争の敗戦直後

昭和二十二年の冬

元陸軍大佐の娘であった少女は

中国大陸から引揚げて来て

舞鶴港で詩を詠んだ

太陽は沈もうとしている 滴るように

全てを任せながら

かもめは飛び交う

人々は甲板に居並ぶ

だが故国のシルエットのみは

じつと私たちを見つめている

船は静かに錨を下ろした

人々は明日からの生活をも忘れ

あふれる思いで絶叫する「お祖国よ」と

微風は太陽の光を

赤錆びた錨の鎖の上にも注いでいた：

編入学した新制高校での最初の文化祭

少女はハムレットのオフエリアを見事演じた

みんなは競って彼女のブロマイドを欲しがったが

少女には大好きなハムレット風の少年がいて

彼は校内の文芸誌に詩を載せたりしていた

冬だ 冬だ 木々の葉は吹っ飛び

敗戦の後の壊れた氷河が世界を分断する

猜疑心の深いやせっぽちな人間の思想は

枢軸を誤って風間に漂い

笑いは漆黒の空にからからと響きを揚げる

ああ 何をか為さん 何をか為すべき

食料車は軌道を見失いて飢餓の町を走り抜け

待ち人たちは食べ物を探しに荒野をさ迷う

終に 律儀な馭者は青白い吐息を吐く：

中国から引き揚げる際に 母を亡くした少女と

南太平洋の戦争で 父を失った少年は

校舎の傍を流れる清冽な小川の

太陽に輝く満開の桜並木の土堤を歩みながら

互いの詩を口ずさんだりした

時に沈黙が運ぶ切ない喜びに手を握り合って

それにしても 貧しい少女は東京に転居して

縁者の元で働かねばならなかった

三人の弟達の学業のためにも

少女と少年は制服のままの体を寄せ合い

熱く抱き合っただけで別れた

川土手の桜並木の満開の花弁が

叩きつけられるように川面に散っていた

突風に狂ったように激しく舞い上げられて

さよなら さよなら さよなら

少女は中国の陸軍大佐のお屋敷の庭で撮った

純白の桜の花のような自分の写真を
そっと少年の手に持たせた

：時は流れ やがてそれとなく噂が聞こえて

東京での孤独な少女はキリスト教の教会に通い

熱心な信者になった彼女は

深く神を信じる清楚で優しい青年に出会った

二人は結ばれて家庭を持ち

彼女は沢山の子をもうけて 懸命に育てあげた

時に 何かを思い出すかのような情熱で

故郷のみんなは七回も同窓会を開いたが

彼女は同窓会名簿に住所を知らせてこなかった

だが 遠い日の純白の桜の花のような少女Mよ
あなたは遠い日の少年Kのアルバムに住んでいた
米寿を迎えた少年の不器用な手に護られて
書齋の古い本箱のガラス棚に丁寧に保管されて

夕陽の心音

森田 美千代

ゆれて半透明な朱みを帯びる
沈みかけ 微風流れていく
夕焼けはご褒美だ
胸の洞まで落ちて魂を揺さぶる

茅の葉で切れた指の朱い痛み
手練り寄せた遠くに霞む
わたしの根っこ
外からは決して見えない傷が核になって
不揃いの色彩のなかの重ねた時間
ざわつく心を飲み干しながら
空の向こうに問う

時は今
空と地上のあいだに
見えないものが揺れている
言葉が行間にねむり

ころろを落として用心深く歩む
ねじれた葉裏を探し
かき集めて心音を聞く

乾いた夏は背後に回り
過ぎ去った遠い記憶の陽だまり
重ねた時間のページをめくる
足跡はほろ苦く
音もなく
声もなく
心音だけ

等しく風が吹きわたる
立ち止まり
覚悟の深呼吸
斜めに低く傾き
今日のいちにちが沈んでいく

水たまり

森野 とうが

雨が小やみになったので
少年は傘を閉じ
地面に浮かんだ水たまりをつつく
傘の先が
いくらか柔らかくなった土の中にぬめり込み
砂利の音が軋んだところで
止まる

傘の先から
地中奥深くに横たわる
逃走にも使える巨大な地下水路
流れ着いた男がひとり何年も迎えを待ち続けた孤島
二万里の海の底を音もなく航行する潜水艦など
いくつもの絵が立ち昇る

背中には細やかな
絹のような小雨が舞いおりて

ひそやかに悦を持ち始めた少年の興奮を
鎮めている
芽生えはじめた秘密を
包んでもいる

水たまりは
ミルクのようにゆったりと波打ち
土気を含んで淡い紅茶色に濁っている
傘をつつくたび
同心円になって波紋が広がる

円くおぼろげに
外へ外へと運ばれていく自分の顔に
少年はまだ気がついていない

春をまつ

山口 洋子

タカではない
トンビの夢を見たのは
年のはじめのおわらいか
（輪を描いて ぴーひよろよろ
なんて 滑翔しているのではなく
荒ら鋤きされた田んぼいっぱい
凹形の尾をこちらに向ける大群
さいしょから降参の姿勢
きつと「ヨダカの食じきたくみ」を読んだからです
寒いな寒いな
黙々とたべ黙々とねむり黙々というわたし
立ち上る煙ではありません

イルカも泳ぐわい
ね。

天空の鳥

山下 輝代

消去しない
振り返らない
立ち止らない

清濁悲喜哀歓

まるごと、ケツカオーライ

(もはや視野翳み臃耳みみおぼろ)

七十年の記憶

まるごとをわたしとして

きょうからを

そう決めた晩秋の明け方

それは不意打ちのようでもあり

ずっと思い描いてきたようでもあり

ほらっ

きょうは空もとびきり晴れやかで

あっ

天空から高らかなさえずり

そのすがたは視えないけれど

だから呼び名も知らないけれど

高らかに謳う天空の鳥を仰ぎみて

これからを

これからへ

「てつぽつぽう」

山下 晴久

あの日と同じ
春の夕まぐれ
てつぽつぽうの
声のする方

詔には天平十三年（七四一）
御寺は国の安泰を願ひ
諸国に建立するとあり
はて、ずっと以前
撞鐘の音や諷経の声を
私は、聞いていた
気がするのだけれど
本当はいつから此処にいて
誰を待っていたのだろうか

其の昔、門をくぐると
回廊につながる金堂が見え
そびえ立つ塔や鐘楼が

配置されてあつた
それから、茜色の空と
夕餉を告げる声も
聞こえていただろうか

さて、近くを列車が走り
踏切の遮断機の音がする
新調したコートを着て
少女は佇み、

永遠に変容を続ける物の姿
何も無い所に星が生まれ
消えてゆくような
それは繕えなかつた
一切のほころび
崩れた築地塀の隙間から
また、てつぽつぽうの
声がする

失われた言葉は美しく
もう一人の私に
届けられる

（但馬国分寺跡より）

秋のビブラート

山本 眞弓

時の隙間を
灼熱の夏を浚うように
野分が走り去った
後に透き通った青い空
耳元を掠める風に
微かな秋の気配

別れは突然だった
ことばで満たされない空洞に
押し寄せる哀しみの波
よるべなき涙
傷痕に触れないまま
あなたは逝った

街にあふれる人
無言の擦れ違い
スマホ見ながら

長く伸びたビルの影に
吞まれて行く
ひとり異邦人のように彷徨う
バス停に立つ
生い茂る草を払うと
白い曼殊沙華
細い線の輪郭は
昨夜の月の面影に似て
幻のあなたを想う

百年かかる？

地雷除去に
原発処理に
ウクライナや
ガザの復興に
百年かかる

ミサイルや砲弾で
やみくもに破壊
毒まき散らし
根こそぎ絶やす
ガレキの山
生まれ変わるには
百年かかる

未来に漂う黒い恐怖
じっと見つめる幼い眼
震える小さな手

心の傷が癒えるのに
時は 置き去りのまま
飢えが身体を蝕む
ことばを奪われ
うつろなまなざし
人が人として生きるのに
時を待つ 猶予はない

ほおずきランプ

横山 美代子

ランプを作った人の想いが灯る^{とも}
闇に浮かぶ
澄色の光となって
自然の色に人を染める
身をおく静寂の中
ほおずき色の時間を過ごす
生みだされる違う次元
心深く届く何か
自分は誰か
投げかける問い
未知なるものを探しつつける

二重のらせんからまる現在と過去
ほどける記憶
長い時間は空っぽの球形
鳴らすために夢中になった
子供の頃に出会ったほおずきの遊び

遠くで点にしか見えなかった未来
大人への憧れを秘めて

数十年かけて
重なりあっていく人の言葉
心を重く残していく歳月
時は足をはやめて追いかけていく
よるべなき暗闇に ランプをつける
包みこまれるあかり
人やものとの出会いによって
失ってしまった心に詩が生まれる^{うた}

宇宙に存在する
一つである自分を感じながら

やさしい気持ち

吉田 定一

あなたは いま
どこに いる
いま あなたは
何 している

きのうの 朝
何を 食べたの
きょうの 終わりに
何を 知る？

わたしは 夕ぐれ ピアニシモ
あなたのことを おもうと
やさしい気持ちに なってくる

きょうの あなたは
誰 かしら
あなたは きょうに
何 おもう

きょうの この日に
メールを 打って
この日の きょうの
不思議を 知る

あなたは 瞳 ナザレの星
遠く ほそく 輝いて
(あの日 あの時の)
あなたの まなざしに 包まれる

*ピアニシモ——強弱音符のこと

*ナザレの星——ナザレの夜空に輝く不思議な星。救い主が生まれると、ユダヤの予言者によって伝えられている星。

新聞に「戦闘機輸出」の文字を見た

凜 清太

一年では見えない

十年経っても気付かないかも知れない

約80年前

多くの人の命を奪い

多くの命を失わせて終わった戦争

あの日の

あの重苦しい解放感を忘れたかのように

また新たに

塗り積重ねられていく「既成事実」

あの時

人々が何よりも願っていた

「平和」が「平和な暮らし」の中で薄らいでいく

のは何故か

「戦闘機輸出」

誰の利益のために

誰の幸福のために

必要なのだろう

一点を見据えていても見えてはこない

時々

あちこちで、ばらばらに少しづつ構築され

将来、誰もが責任を負うことのないまま

描かれていく構図

「NO」と言えなかった

人と人を見えない線で区切られた

あの窮屈な「檻」が見えてこないか

残り少なくなっていく戦争体験者

願いは世代を超えて届いているのだろうか

だが、まだ

条文は明記されている

多くの人の犠牲の上に制定された日本国憲法の条文

日本国民だけでなく

世界の人々が希求してやまない

「平和への願い」が記されている条文

現実に応答して作られていく法律をいくら積重ねても

決して、その「高さ」には及ばない

命をいとおしむ人々の崇高な願いだ

まだまだ、遅くはない

きっと、まだ間に合う

難破船

渡辺 信雄

街外れに、エトワールというホテルの廃墟が見える。崩落していく壁、窓は枠だけになり風が吹き抜ける。男と女が体を重ね合い、夢を貪りあった夢の跡。部屋では、日ごと夜ごと何人も入れ替わり、営みは繰り返され。蔦の葉が絡まり草が人の丈まで生い茂る建物を、何匹もの猫が出入している。まだ生きている人間がいるのだ。私は赤茶けたシヤッターの閉められた商店街の事務所にいる。アーケードはとっくに破れ果て、何光年も離れた星の光が瞬いている。みんな何処かへ去ってしまった。商店街のネオンが不整脈を繰り返している。ひと昔前に聞いたアイドル歌手の愛の歌「難破船」が流れている。ガラス張りの柵から書類がはみ出している。意味のわからない言葉で、自己満足の言葉の羅列。いつまでも理念も文もステロタイプだ。人の営みは塵のように積もっては、飛ばされていく。あらゆる祭りは終わり、人は思い出だけで生きている。月影が地上を闇に塗りつぶしていく。螢の光のように点滅している光は何か。

エレジー

約束はしていなかったのに
密やかにあなたは訪れた
畦道に公園の隅に
忘れていなかったのだね
ひっそりと
炎焔を揺らめかせて
黙って立っている君
淋しい背中を抱きしめたかった

あ、血の色の蜻蛉が
あなたの指に
そうして、私の指に留まった

……

別れの言葉はなかったのに
澄んだ中空を
薄い翅を煌めかせて
飛んでいく

会員の発行物

■詩集・小説・評論・随筆

〈2022年11月～12月〉

岩崎風子『ちから詰まる日』12月刊（思潮社）

〈2023年〉

高木敏克『神撫』1月刊（濤標）

永井ますみ『夜が明ける』5月刊（山の街企画）

神尾和寿『巨人ノ星タチ』6月刊（思潮社）

たかとう匡子『私の女性詩人ノートⅢ』7月刊（思潮社）
朝倉裕子『母の眉』9月刊（編集工房ノア）
野元正『こうべ文学逍遙 花と川をめぐる風景』10月刊（神戸新聞総合出版センター）
坂東里美『考える脚』12月刊（濤標）

〈2024年1月～10月〉

たかとう匡子『ねじれた空を背負って』3月刊（思潮社）
時里二郎『時里二郎詩集』5月刊（思潮社）
玉川侑香『平野のまちの物語』5月刊（風来社）
増田まさみ『かざぐるま』7月刊（霧工房）
今村欣史『湯気の間こうから』7月刊（私家版）
江口節『扉が開くと』7月刊（編集工房ノア）
朝倉裕子『雷がなっている』8月刊（編集工房ノア）
工藤恵美子『柿色の家』10月刊（編集工房ノア）

〈2022年11月～2023年6月〉

- 「別嬢」116号／高橋夏男
- 「現代詩神戸」280号／永井ますみ
- 「日曜日の旅人」3号／神田さよ
- 「鶴鶴」19号／江口節
- 「月刊MAROAD」179号～184号／大橋愛由等
- 「EDGING」54号／寺田操
- 「あむの木通信」164号～169号／福永祥子
- 「多島海」43号／江口節

〈2023年7月～2023年10月〉

- 「プラタナス」71号／神戸詩人会議・玉川侑香
- 「風の音」25号／野口幸雄
- 「Messier」61号／佐伯圭子
- 「別嬢」117号／高橋夏男
- 「現代詩神戸」281号、282号／永井ますみ
- 「ア・テンポ」63号／玉井洋子
- 「月刊MAROAD」185号～187号／大橋愛由等
- 「鶴鶴」20号／江口節
- 「あむの木通信」170号～173号／福永祥子

〈2023年11月～2024年6年〉

- 「木想」14号／高橋富美子
- 「現代詩神戸」283号～285号／永井ますみ
- 「ア・テンポ」64号／玉井洋子
- 「月刊MAROAD」188号／大橋愛由等
- 「プラタナス」72号／神戸詩人会議・玉川侑香
- 「多島海」44号／江口節
- 「風の音」26号／野口幸雄
- 「汽水湖」5号／福永祥子
- 「日曜日の旅人」4号／神田さよ
- 「鶴鶴」21号／江口節
- 「あむの木通信」174号～183号／福永祥子

〈2024年6月～2024年10月〉

- 「ア・テンポ」65号、66号／丸田礼子
- 「現代詩神戸」286号／永井ますみ
- 「夜凍河」23号／滝悦子
- 「別嬢」118号、119号／高橋夏男
- 「プラタナス」73号／神戸詩人会議・玉川侑香
- 「EDGING」58号／寺田操
- 「風の音」27号／野口幸雄
- 「LingvoオクトM+」23号、24号／高谷和幸
- 「あむの木通信」184号～186号／福永祥子

編集メモ

詩を書くのに初心者、熟練者の区別はありません。必要なのは、言葉で考え、それを文字にすることだけ。詩を書くかと思つた時、その人はもう詩人です。そして新しく詩を書く時、詩人はみな初心者です。ま新しい目で世界を見ることで、詩は生まれるから。

担当理事の逝去という悲しみの中、有志で編集チームを立ち上げました。今号の参加者は九十五名。前々号百名、前号の百一名に比べて、周知が足りなかったこと、お詫びいたします。また、カバー装画の中堂けいこ様、扉装画の彼末れい子様、珠玉の作品をお寄せいただいた会員各位に感謝いたします。

阪神淡路大震災の余震やまぬ1995年3月12日、六名の詩人の呼びかけから始まった『詩集・阪神淡路大震災』は、第二集、第三集と続き、兵庫県現代詩協会発足を経て『ひょうご現代詩集』となり、以降版を重ねてきました。

詩作という苦しみを経た魂の結晶、『ひょうご現代詩集2024』（通巻17集）を、ここにお届けいたします。どうぞ、ごゆるりとご鑑賞ください。この本が会員の交流の一助になりますよう。また次の世代へ言葉を繋ぐための記憶となるようお願いしつつ。

アンソロジー編集チーム…安西、神田、北野、丸田（文・北野）

ひょうご現代詩集2024（通巻17集）

発行 2025年3月20日
発行人 時里 二郎
編集・発行 兵庫県現代詩協会
〒657-0846 神戸市灘区岩屋北町4-4-5-902
野口 幸雄（兵庫県現代詩協会事務局）
ホームページ <https://hyogopoetry.sakura.ne.jp/main/>
印刷所 株式会社 遊文舎
〒532-0012 大阪市淀川区木川東4-17-31
TEL 06-6304-9325 FAX 06-6304-4995
URL <https://www.yubun.co.jp/>

